
IS（インフィニット・ストラトス） 創聖ノ翼

アナザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス

IS 創聖ノ翼

【Nコード】

N4403Y

1

【作者名】

アナザー

【あらすじ】

「えっと、はじめまして、織斑アポロです。ある日、僕の兄の織斑一夏こと一兄が女性にしか使えないマルチフォームスーツ『IS』インフィニット・ストラトスを起動させてしまった。それで僕もISが使えたので一兄と共に僕たち兄弟以外女性しかない『IS学園』に登校する羽目に!？」
はい、どうも、アナザーです。この作品はオリ主である男の娘「男でいいんだよ!？」インフィニット・ストラトス「わかったから。『織斑アポロ』によるアクションなのかギャグなのか恋愛なのかよくわからん作品です。まあ、一生懸命やってみますのでどうかよろしくお願いします。」

「僕からもよろしくお願いします！」

第零話 出会は突然、いや必然でもある。(前書き)

はい、どうも、アナザーです。

とうとう出しちゃいました、IS。

ま、バカテスと何とか両立していると思いますんで頑張ってみます。

では、第零話、GO！

第零話 出会いは突然、いや必然でもある。

ながい…………

ぼくはいったいどのくらいのときをいきつづけているのだろうか？

ぼくのしりあいはなんにんしん？

なんでぼくはこんなにも□□□□□だろう？

なんでぼくのかぞくはいないのだろう？

どうしてぼくはひとりなのだろう？

「ねえ」

どうしてぼくにはかえるばしよがないんだろう？

「ねえってば！」

「!！」

え？ぼく？

「……なに？」

「どうしてきみはひとりでないの？」

ないてる？ぼくが？

あ、ほんとうだ。めがぬれてる。

「うん……………ぼくは……………ひとりぼっちだからね……………かぞくもいない……………かえるばしょもないんだ……………」

そう、ぼくはひとりだ。

「じゃあおれんちにきなよ！かぞくになろ！」

.....え？

「どうして？」

「だってさ、ひとりじゃさみしいだろ？」

「ううん。もうなれたよ」

「じゃあなんでないてるのさ」

「それは……………」

「いいから！おなかもすいてるだろう？」

「すいてな（ぐうぐう）……………」

そういえばここさいきんぜんぜんたべていなかったかな？

「ほら。いこう？」

このこは……………やさしきでいってるんだね。ほんとうにやさしい。みんなぼくのこととはみてみぬふりだったからね。

「いいの？」

「いいよ！ほら」

ぼくはこのことあるきはじめた。

「おれはおりむらいちか。きみのなまえはなに？」

なまえ……………ぼくのなまえ……………

「あぼろ……………アポロっていうんだ」

「よろしく! アポロ!」

「よろしくいちか」

ありがとう……………

こんなにあたたかいの……………



今思えば僕の人生はここから良い方向へと変わったのかもしれない。

第零話 出会いは突然、いや必然でもある。(後書き)

GO! って言った割には終わるのが早っ!

では、すぐに第一話を投稿しますんで。

では、サラバッ!

オリキャラ設定 「織斑アポロ」 (前書き)

はい、今回は織斑アポロについてです！

では、本編GO！

オリキャラ設定 「織斑アポロ」

＊織斑 アポロ

性別・男の娘「男だから!」

身長・149.1?

イメージCV・渡辺明乃

テイルズオブリバース マオ

魔法先生ネギま! 絡繰 茶々丸

とある魔術の禁書目録 シェリー・クロムウェル

腰まで長い漆黒の黒髪を首の後ろで纏めていて瞳の色は千冬と同じで純白の肌をしている。髪を止めていなかったら「恋姫無双」の「明命(周泰)」にそっくりで違うと言えば目の色と肌の色ぐらいだ。見事な男の娘と化している。声も女の子っぽいのでさらに間違えやすい。

性格は一夏と違ってきっちりして勉強もできる。家事は何でもこなすのでメイド服が意外と似合うかもしれない。というか束に着せられた過去あり。お化けが苦手である。千冬と束からかなりかわいがられていた。一夏と箒にもかわいがられていた。だが、千冬のブラコンが日に日に悪化している気がして困っている。そして、大抵の読者様は予想できていると思うがやはり鈍感である。

オリキャラ設定 「織斑アポロ」 (後書き)

千冬ブラコン説を書いています。が序盤はまだ発揮されません。日常などに入ればかけると思いますので。

では、サラバツ！

第一話 クラスメイトは兄弟以外は全員女子！？（前書き）

はい、一日でどんだけ出してんだよ。アナザーです。
とりあえず先に言っておきますがアポロ君は男の娘です。
もう言っているとは思いますが大切なことなので。

では、本編GO！

第一話 クラスメイトは兄弟以外は全員女子!?

アポロSIDE

どうも、初めまして、織斑アポロです。

僕と兄の織斑一夏おりむらいちかこと一兄いちにいは今厳しい状況下に立たされています。

山田「全員揃ってますねー。それじゃあSHRをはじめますよー」

黒板の前でにっこりと微笑む女性副担任の山田真耶先生。

身長はやや低めで、生徒のそれとほとんど変わらない。

でも、服のサイズが合っていない。だばっとしていて本人がますます小さく見えてしまう。

そしてかけている黒緑メガネもやや大きめなのかな？若干ずれている。

山田「それでは皆さん、一年間よろしく願いしますね」

と、山田先生が挨拶をするけど……

『……………』

教室の中は変な緊張感に包まれていて誰からも反応が出ない。

ちよつとうろたえている先生が可哀そうだから返事をしようと思うけどそんな勇気は僕にない。なぜかって？

簡単だよ？

僕と一兄以外のクラスメイトが全員女子だからだよ。

ハーレムとか眼福だろとかリア充とか思ってるそのあなた。ここはそんな場所じゃない。気まずすぎるもん。この状況は簡単に言えば自分の周りの席が知らない女子ばかりな状況だよ？しかも皆こっちをジッと見つめてくるんだよ？気まずすぎて涙が出てきそうだよ？

で、でも！頑張ろう！よしせゝのっ！

アポロ「や、山田先生！よ、よよ、よろしくお願いしまひゅ……
……

ぐすん……（涙目）」

『……………』

……………。噛んだ。最悪だよ……………。あと少しで任務達成だったの
に……………。空気が死滅しちゃったよ。
ミッションコンプリート

『……………』

ほら！皆黙っちゃったよ？気まずさが凄いんだけど！あああああ！
！どうしよう！空気が重すぎるよ！一兄も「やっちまったな」って
顔してるもん！

『……………』

……………って、アレ？なんか様子がおかしい気が……………

山田「え、えーっと、よろしくお願いしますね？（か、かわいいです！）」

女子1「（人形みたいだしすごくかわいい！）」

女子2「（お持ち帰りいいいいいいいい！）」

女子3「（あんなにお人形さんみたいにかわいい子いたっけ？）」

アレ？どうしてかな？寒気がするよ？

山田「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

あ、アレ？何とかうまくいったのかな？でもなんか静かだから……
……失敗？

と、考えてる場合じゃないや。もう僕の番だ。自己紹介ぐらいはち

やんとしないと！

アポロ「ええーっと、織斑 アポロ、です。趣味は料理と……あ、パソコン弄くりで好きな食べ物は………ケーキとか甘いものです！え、えっと………特技は暗記や運動です！」

あ、あと一つ言っておかないと！

アポロ「最後に！僕は男です！絶対に間違えないでください！」

今までたくさん女の子と間違えられてきたから言っておかないと！
言われるたびに傷つくんだもん！

『きやあああああ！かわいいiiiiiiiiiiiiiiii！』

アポロ「ふえっ！？」

突然響いたクラスメイト達からのバインドボイス。この音量はモンハンのティガレックスをはるかに凌駕すると思う。別にラオシヤンロンでもいいけど。

女子1「本当に男の子！？」

女子2「違うわ！アレはいわゆる男の娘よ！」

女子3「さっきは言えなかったけどお持ち帰りiiiiiiiiiiiiiiiiいー！」

女子4「と言うか本当に高校生？」

ちょっと！僕はちゃんとした男の子だよ！そして一名どうしたの！
？目が凄いことになってるんだけど！？そして最後の人！背が低いことをピンポイントで言わないで！悲しくなるから！

山田「で、では次の人！織斑くん！じゃなくって……織斑一夏くんっ！」

一夏「は、はいっ！？」

一兄はびっくりしたのか声を裏返してしまった。周りからはくすくすとして笑い声も聞こえる。一兄寝てた？

山田「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。お、怒ってる？怒ってるかな？ゴメンね、ゴメンね！でもね、あのね、自己紹介、『あ』から始まって今織斑アポロくんが終わって次には織斑一夏くんなんだよね。だからね、ご、ゴメンね？自己紹介してくれるかな？だ、ダメかな？」

一兄に山田先生がぺこぺこ頭を下げる。一兄、早く自己紹介してあげなよ。

一夏「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていうか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

山田「ほ、本当？本当ですか？本当ですね？や、約束ですよ？絶対ですよ！」

がばっと顔を上げて一兄の手を取って熱心に詰め寄る山田先生。そして一兄に向けて視線が一気に向けられた。この視線の量はできれば一兄と山田先生のやり取りが原因であってほしい。僕が女の子だ

と思われていたのは嫌だ。

そして、一兄は立ち上がった。

一夏「えー……えっと、織斑一夏です。よろしくお願いします」

礼儀的に頭を下げる一兄。しかし周りの皆様は満足していないようである。皆「これで終わりじゃないよね？」って感じである。

もしかしたら僕のせいかも。だとしたらゴメンね一兄。

そして一兄は一度呼吸を止めて再度息を吸った。どうするの？

一夏「以上です！」

がたたたっ！

一兄、そんなに溜めておいてそれはないよ。

パァン！

一夏「いっ——！！？」

あ、一兄が頭を叩かれた。と言うか叩いた人が……

一夏「げえっ！関羽！？」

パァンッ！

??? 「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

トーンが低めの声。幻聴かな？ドラの効果音まで聞こえるんだけど？
それにしても千姉ちーねえ、学校の先生やってたんだ。

山田「あ、織斑先生。もう会議は終わられたんですか？」

千冬「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押しつけてすまなかったな」

あ、優しい声になった。関雲長は何処へ行ったの？赤兎馬に跨って
劉備の元へ去ったの？

山田「い、いえっ。副担任ですから、これくらいはしないと……」

あ、山田先生はに canders。それに視線と声も少し熱っぽくなって
いる。

千冬「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる蒼
従者に育てるのが仕事だ。私の言う事はよく聴き、よく理解しろ。
出来ない者には出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠十五才を
十六才まで鍛え抜く事だ。逆らってもいいが、私の言う事は聞け。
いいな」

いきなりの暴力宣言。普通ならドン引きだよね。そう普通なら、ね。

この教室には困惑のざわめきじゃなくなっ

女子1「キャ——————！千冬様！本物の千冬様よ！」

女子2「ずっとファンでした！」

女子3 「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

女子4 「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

女子5 「私、お姉さまのためなら死ねます！」

きゃいきゃい騒ぐクラスメイト達を千姉はうっとおしそうな顔で見る。

千冬「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？私のクラスにだけ集中させてるのか？」

これがポーズじゃなくて本当にうっとおしがっている千姉。人気は買えないんだからもう少し優しくしたら？

と、考えた僕はまだまだ甘かったのだ。

女子6 「きゃああああああっ！お姉さま！もっと叱って！罵って！」

女子7 「でも時には優しくして！」

女子8 「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

元気で何より、なのかな？

千冬「で？挨拶も満足にできんのか？お前は」

極めて手厳しいですね。これが千姉。まさに辛辣。

一夏「いや、千冬姉、俺は」

パンツ！

あ、またやられた。知ってる？千姉。頭を叩くと脳細胞が五千個死ぬらしいよ？

千冬「織斑先生と呼べ」

一夏「……はい、織斑先生」

で、このやり取りはまずかったみたい。二人が姉弟なのがバレてしまった。

女子9「え……織斑くんって、あの千冬様の弟……？」

女子10「それじゃあ、世界で唯一男で『IS』を使えるっていうのも、それが関係して……」

女子11「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

最後のはスルーしよう。とりあえずISは女性にしか使えないんだ。だけどここにいる一兄はISが使える。

女子12「ちょっと待って……もしかして織斑アポロくんも千冬様の弟!？」

あ、よかった。ちゃんと男って思われてる。結構悲しいからね、女

って思われるの。

千冬「静かにしろ！SHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

まさに鬼教官だね、千姉。ドイツ軍にいた時もこんな感じだったっけ？

っと、一時限目はIS基礎理論授業だったね。準備しないと。

で、授業が終わった。僕は大丈夫だったけど、

一夏「あー……」

一兄が死んじゃってる。まあ、原因は授業だけじゃないんだけどね。

このIS学園では僕と一兄以外は全員女子なのだ。

廊下には他のクラスの一年生だけじゃなくて二年生や三年生の先輩方も詰めかけている。

女子だけこの空間に馴染んでしまっているのか、なかなか僕たちに話しかけるといふことはしない。

元日本代表で女子たちの憧れの的の千姉の弟ならなおさらだね。

???「……ちょっといいか」

一夏「え？」

と、一兄が誰かに話しかけられた。誰かと思ったら「篠ノ之^{しのののぼうぎ}箒」、
箒姉だった。確か……六年ぶりだね。

箒「廊下でいいか？」

何だろう？教室じゃ話にくい事なのかな？

一夏「え、えっと……」

一兄が気まずそうにこっちを見る。

アポロ「僕なら大丈夫だよ。行ってあげなよ一兄」

一夏「悪いな、アポロ」

確かにこの空間に一人取り残されるのは少し気まずいけどただそれだけ。

空気が辛いけど我慢我慢。箒姉のために、ね？

それで一兄と箒姉は廊下へ出て行った。

でもやっぱり空気が辛いかな？

……………次の授業まで少し寝ようかな？昨日少し睡眠不足だったし。

……………じゃあ……………おやす……………み……………

ちなみにアポロが寝ている時に時々言う寝言や仕草で数人の女子がかなり悶えたのであった。

アポロ「僕たち以外女性しかないこのIS学園での生活がスタート！」

一夏「無理無理無理無理！」

アポロ「諦め速いよ！一兄！」

一夏「だって気まずすぎだろ！」

アポロ「そしてクラスでまた何かある予感！」

一夏「できれば面倒事になりませんように！」

アポロ「それは僕も同じだから！巻き込まれませんように！」

一夏、アポロ「次回！」「イベントからは逃げられない！」って！タイトルの時点で希望が消えた！」

第二話 イベントからは逃げられない！（前書き）

はい、課題が終わって暇だったので悶々書いていたら第二話ができたアナザーです。

ちなみにまだ出ていませんが転生者は男の予定です。どんな奴かはまだ秘密です。

では、本編GO！

第二話 イベントからは逃げられない！

アポロSIDE

ちょうど授業開始前に起きて二限目。

山田「————であるからして、ISの基本的な運用は現時点で——」

すらすら教科書を読んでいく山田先生。

ちなみに一兄は、

一夏「……………（プスプスプス…………）」

大丈夫なのかな？頭から煙出てるけど……………

いかにもわかりません的なオーラ出してるし。

でも、これが普通だと思う。ISは女性にしか扱えないのだからISに乗れない男性はISの事なんて全然知るはずがない。いるとし

ても研究者ぐらいだ。これはまさに生まれて間もない赤ん坊に対してパソコンを使って報告書を書けと言っているようなものだ。一兄は悪くない。

山田「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

一夏「あ、えっと……」

山田「わからないところがあつたら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから」

おお、以外に頼れる先生なのかな？

一夏「先生！」

山田「はい！織斑一夏くん！」

一夏「ほとんど全部わかりません！」

一兄……僕は一兄のそういう素直なところ、嫌いじゃないよ。

山田「え……ぜ、全部、ですか……？」

顔が見事に引きつってる山田先生。アレ？頼れる先生はどこへ？

山田「え、えっと……織斑一夏くん以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

シーン……

まあ女子は男子と違ってここに入れるからね。それくらい勉強はしてるはずだよ。さっきも言ったけど男がISについて全然知らないのは別に恥じる事じゃない。使えない物の知識を得ていても意味は無いからね。

千冬「……織斑兄、入学前の参考書は読んだか？」

教室の端で待機していた千姉が訊いてくる。

一夏「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

千冬「貴様は何をしているか」

読んだけどまだわからないとかならわかるよ？でもさ、電話帳と間違えるのはおかしくない？

千冬「あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

一夏「い、いや、一週間であの厚さはちょっと……」

千冬「はあ……（私も甘くなったな……）織斑弟、教えてやれ」

アポロ「え？あ、はい。わかりました」

一夏「おおっ、アポロが教えてくれるなら安心だ」

アポロ「教えるからには絶対に覚えてね。ここにいる以上憶えない

といけないことだからね」

一夏「わかった」

ISは最終的には兵器だからね。ちゃんと覚えなといけない。

千冬「あー、んんっ！山田先生、授業の続きを」

山田「は、はいっ！」

とりあえず、前途多難だね。

で、二時間目の休み時間。

僕は一兄といろいろ話している。と言うか一兄か姉姉ぐらいしか喋れる人がいないんだよ。男子はまず僕たちしかいないしね。

??? 「ちょっと、よろしくて？」

一夏「へ？」

アポロ「え？」

僕と一兄は突然声をかけられた。

声の主を見ると、地毛の金髪が鮮やかな人だった。

白人特有の透き通ったブルーの瞳が、やや吊り上った状態で僕たちを見ている。わずかにかったロールの髪はいかにも高貴なオーラを出していた。

見てからすぐに分かった。この人は「いかにも」今の女の人だ。

金髪の女性「訊いてます？お返事は？」

アポロ「あ、すみませんでした。どうしましたか？」

とりあえず答えないと失礼だね。

金髪の女性「ふん。まあそれなりの返事ですわね。ですが、わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですからもう少しそれなりの態度と言う物があるのではないかしら？」

うーん……………どうやら気に食わなかったらしい。

一夏「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

知らないは無いよ一兄？自己紹介したじゃなか。クラスメイトは覚えておこうよ。すぐには無理だとは思うけど。

セシリア「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

へえ、オルコットさん、入試主席だったんだ……………

一夏「あ、質問いいか？」

オルコット「ふん。下々の者の要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

一夏「代表候補生って、何？」

がたたたっ

…………一兄、それは結構重要だよ。テレビやニュースでも代表とかについてあったじゃなか。一兄も見てたでしょ？クラスの皆はずっこけちゃったし。

オルコット「あ、あ、あ、……………」

一夏・アポロ「あ？」

オルコット「あなたっ、本気でおっしゃってますの！？」

すごい剣幕だった。

一夏「おう。知らん」

一兄、本当に素直だね。素直すぎるよ……………

ほら、オルコットさんも怒るを通り越して逆に冷静になってるよ。

オルコット「信じられない。信じられませんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地なのかしら。常識ですわよ、常識。テレビが無いのかしら……」

大丈夫です。ちゃんとあります。一兄がニュースをあまり見ないだけです。

一夏「で、代表候補生って？」

アポロ「一兄、たまにはニュースを見ようね？じゃあ、よく聞いてね？代表候補生はね、国家代表IS操縦者の、その候補生として選ばれる人、簡単に言えばエリートだね。単語からわかるでしょ？」

一夏「確かに……………」

オルコット「そう！エリートなのですわ！あなたはよくわかっているではありませんか！」

なんだか知らないけど今度は褒められた。エリートってところに反応してたけど。

とりあえず僕に指差さないで。人に指差しちゃダメ。

オルコット「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラス

を同じくするだけでも奇跡、……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

一夏「そうか。それはラッキーだ」

一兄、それじゃあ挑発してるように聞こえちゃうよ？まあ、オルコットさんが幸運だって言ったんだけどね。

オルコット「……馬鹿にしていますの？」

ほらやっぱり。挑発にとられちゃってる。

オルコット「もう片方はまだいいとして、あなたはよくISについて何も知らないくせによくこの学園に入れましたわね。男でISを操縦できると聞いていましたけど期待はずれですわ」

一夏「俺達に何かを期待されても困るんだが」

オルコット「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたのような人間にも優しくしてあげますわよ」

この態度が優しいなら世界の大抵の人間は優しいかかなり優いで構成されると思うよ？

オルコット「ISのことでわからないところがあれば、まあ……泣いて謝れば教えて差し上げててもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

唯一、を凄く強調してたね。

一夏「ん？入試って、あれか？ISを動かして戦うやつ？」

オルコット「それ以外に入試なんてありませんわ」

一夏「あれ？俺も倒したぞ、教官」

オルコット「は……？」

そうなんだ、一兄は教官を倒したんだ。ちょっと意外。

オルコット「わ、わたくしだけと聞きましたか？」

一夏「女子だけってオチじゃないのか？」

ピシッ

あ、なにかヒビが入ったような音が聞こえた。

オルコット「つ、つまり、わたくしだけでないと……？」

一夏「いや、知らないけど」

オルコット「あなた！あなたも教官を倒したっていうの！？」

一夏「うん、まあ。たぶん」

オルコット「たぶん！？ちょっと！あなた！」

オルコットさんは今度は僕を指差してきた。だから人に指を刺しちやダメだって。

アポロ「え？僕？」

オルコット「そうですわ！あなたは教官を倒したのですか！？」

アポロ「え？え、え、え、？えーっと————」

キンコンカーンコン。

おお！さすが福音^{チャイム}！さすがだよ！空気読んでる！オルコットさんか
らしたらKYと思うけど。

オルコット「っ……！また後で来ますわ！逃げないことね！よくつ
て！？」

よくないと言いたいけど怒られるよね？

千冬「それではこの時間は実戦で使用する各種装備の特性について
説明する」

三時間目は山田先生じゃなくなつて千姉が教壇に立っている。山田先
生は手にノートを持っているからよほど大切な事なんだよね。

千冬「ああ、その前に再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者

を決めないといけないな」

ふと、千姉が思い出したように言う。

千冬「クラス代表者とはそのままの意味だ。ちなみにクラス対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点ではたいした差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

うーん……めんどくさそうだな………できればしたくないかも。

女子1「はいっ。織斑一夏くんを推薦します！」

女子2「私もそれが良いと思います！」

よし、一兄が集中されている。これで僕は安全かな？

千冬「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？自薦他薦は問わないぞ」

一夏「お、俺!？」

一兄が立ち上がり視線が一兄に一気に向けられる。「彼ならなんとかしてくれる」とおう無責任な視線だった。

千冬「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

一夏「ちよっ、ちよっと待った！俺はそんなのやらな——」

千冬「自薦他薦は問わないと言った。他薦された者に拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

一夏「なら俺は織斑アポロを推薦する！」

ちよ……（ゝ・ω・ゝ）……………一兄酷いよ……………なんd「納得がいきませんわ！」え？

パンツと机をたたいて立ち上がったのはオルコットさんだった。

オルコット「そのような選出は認められません！代替、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……………オルコットさん。いくらこの世の中とは言えども男を嫌いすぎてる気がする。別の理由があるのかな？何かあったのかな？

オルコット「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

僕たち、人間じゃなくなっていない？というかイギリスも島国のよう……な……

オルコット「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、

そしてそれはわたくしですわ!」

エンジンが温まって来たのかオルコットさんの罵倒はさらに強くなる。

オルコット「大体、文化として後進的な国で暮らさなくてはいいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

一夏「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

オルコット「なっ……!?!」

あ、一兄「やっちゃった」って顔してる。あー、オルコットさんめちやくちや怒ってる。

オルコット「あっ、あっ、あなたねえ! わたくしの祖国を侮辱しますの!?!」

いや、最初に侮辱したのはオルコットさんの方じゃない?

オルコット「決闘ですわ! もちろんその自分には関係ないって顔しているあなたも! って! 何露骨に「なんで? 嫌だよ?」って顔してるんですか!」

アポロ「ええー、でも……」

一夏「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい。アポロもそれでいいだろ」

アポロ「うん……………もういいや……………好きにして……………」

一兄……………その素直な所、好きだけどたまに恨むよ。

オルコット「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隷にしますわよ」

奴隷って今のこの時代で許されるっけ？

一夏「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

オルコット「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとな機会ですわね！」

一夏「ハンデはどれくらいつける？」

え？一兄？まさか、オルコットさんからハンデもらう気？

オルコット「あら、さっそくお願いかしら？」

一夏「いや、俺がどのくらいハンデつけたらいいのかなーと」

と、一兄が云った瞬間にクラスから爆笑が起きる。まあ、箒姉や一部は笑っていないけど。

女子1「お、織斑くん、それ本気で言ってるの？」

女子2「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

女子3「織斑くんは、それは確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎよ」

確かにそうかもしれない………だけどわからないよ？今は一兄だけだけどそのうちにたくさん出るかもしれないのだから。世界は簡単に変わってしまうのだから。

一夏「……じゃあ、ハンデはいい」

セシリア「ええ、そうでしょうしょうでしょう。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのかを迷うくらいですわ。ふふっ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

オルコットさんは明らかな嘲笑をその顔に浮かべていた。

女子1「ねー、織斑くん。今からでも遅くないよ？セシリアに行って、ハンデ付けてもらったら？」

一夏「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデは無くてもいい」

女子1「えー？それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？じゃあ、織斑アポロ君は？」

アポロ「え？僕？」

女子1「ハンデ付けた方がいいよ！」

ハンデ……………

アポロ「僕もいない」

女子1「いや、だって――――」

アポロ「男だから？」

女子1「え？」

アポロ「男だからISを使ってもオルコットさんに勝てないって言いたいのか？」

女子1「え、えっと……」

どうやら図星らしい。

オルコット「本当にいらないのですか？無残に負けても知りませんわよ？男が女に勝てるはずがありませんもん」

アポロ「そう決めるのは早いと思うな。やってみないと分からないよ？」

千冬「……話はまだまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑兄弟とオルコットはそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

さっきまではめんどくさいって思ってたけどやめた。

絶対に負けるもんか。

第二話 イベントからは逃げられない！（後書き）

はい、結局アポロもセシリアと対戦することになったちゃった。

アポロ「絶対に負けない！」

おーおー、やる気入ってること。

最初の頃のセシリアはあんまり気に入らなかったんだよねー。

最初は、ね。

アポロ「移り変わり速いね」

ちなみに作者はシャルロット党です。

では、次回予告！

《次回予告》

アポロ「オルコットさんとの対戦、絶対に負けられない！」

一夏「おお！絶対に勝つぞ！ってなわけで家に帰って作戦会議だ！」

山田「え？二人とも今日からIS学園の寮に住むんですよ？」

一夏、アポロ「え？」

山田「次回、『初日は意外に長い』」

一夏、アポロ「スルーですか？」

山田「あ、ちなみに次回は織斑アポロ君の部屋しか紹介しませんから。織斑一夏君を見たい場合は原作を見ることをお勧めします」

一夏、アポロ「ちゃっかり宣伝!？」

第三話 初日は意外に長い（前書き）

はい、何か今日は調子が良いです。アナザーです。
なんかジャンジャンバリバリ進みますね。
バカテスもやらないと………

では、本編GO！

第三話 初日は意外に長い

アポロSIDE

一夏「うう……………」

放課後、一兄は机の上でぐったりしていた。

アポロ「大丈夫？一兄」

一夏「い、意味が分からん……………なんでこんなにややこしいんだ……………？というかどうしてアポロは分かるんだ？」

アポロ「えっと……………勉強してたら覚えちゃった。まあ、一兄じゃなくても多分大抵は知らないから大丈夫だよ。男はISに乗れないから知ろうともしないからね」

一夏「それにしても……………」

アポロ「言わなくていいから一兄。気持ち分かる」

なんせ昼休みで学食に移動するときでさえたくさん人が付いてきたんだもん。やっぱり結構精神的にきついよね。

今でもきゃいきゃいと小声で話している女子が多数。男子が二人だけってやっぱりつらい。

山田「ああ、二人とも。まだ教室にいたんですね。よかったです」

一夏、アポロ「はい？」

呼ばれて顔を上げると副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

山田「えつとですね、寮の部屋が決まりました」

そう言って山田先生は部屋番号の書かれた紙とキーをくれた。

そう言えばIS学園って全寮制だったね。

一夏「俺達の部屋、決まっていなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

山田「そうなんですけど、事情が事情なので一時的に処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。……二人ともそのあたりのことって政府から聞いてます？」

最後は僕たちだけに聞こえるように耳打ちしてきた。

まあ、今まで前例のなかった「男のIS操縦者」だからね。日本政府も保護と監視の両方を付けたいよね。

……それに……して、も……

山田「そう言うわけで、政府特命もあって、とにかく寮に入れるの

を最優先したみたいです。一か月もすれば個室の方が用意できますから、しばらくは相部屋で我慢してください」

アポロ「わか、りましたけど……先生、…耳に息がかかって……くすぐったいです……んっ………」

さっき、から……くすぐったいな………」

山田「あっ！ いやっ！ わざとじゃないんですよ!？」

アポロ「は、はいっ……わかって、ますから……くすぐったいです………」

山田「は、はい！ ごめんなさい、織斑アポロ君!」

アポロ「ふう……あ、僕の事はアポロでいいですよ？ いちいちフルネームだと呼びにくいですね」

山田「あ、わかりました。アポロ君」

織斑弟君とかも言いづらいしね。

一夏「それで、山田先生？ 部屋はわかりましたけど、荷物は一回家に帰らないと準備できないですし、今日はもう帰っていいですか？」

山田「あ、いえ、荷物なら………」

千冬「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

と、千姉からのお言葉。一兄は最近無条件でダースベイダーかター

ミネーターの曲が脳内で流れるって言った。

アポロ「ところで何を持って来たの？」

千冬「着替えと、携帯電話の充電器だ」

大雑把すぎる。日々の潤いは大切だと思います、千姉。

山田「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂で取ってください。ちなみに各部屋にはシャワーがありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと、その、二人は今のところ使えません」

一夏「え、なんでですか？」

アポロ「一兄、大浴場が好きなのはわかるよ？でもね、ここは女子しかないんだよ？まさかだけど同年代の女子と一緒に風呂に入りたいの？」

一夏「あー……そうだったな」

ここには女子しかないってこと忘れてたね？

山田「おっ、織斑くんっ、女子とお風呂に入りたいんですか！？だっ、ダメですよ！」

一夏「い、いや、入りたいくないです」

山田「ええっ？女の子に興味がないんですか！？そ、それはそれで

問題のような……………」

アポロ「山田先生、落ち着いてください。ちゃんと一兄も女の子には興味ありますから妄想の海から戻ってきてください」

山田「あ、そうですか？よかったです。もし、織斑くんがそうだったら……………」

ちなみにさっきの山田先生の言葉が聞こえたのか廊下で効いていた女子たちは『婦女子談義』を始めてしまった。

うん、聞こえない。「織斑くんとアポロ君が……………」とか聞こえない。

山田「えっと、それじゃあ私たちは会議があるので、これです。二人とも、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

校舎から寮まで五十メートルしかないのにどうやって道草くえばいいんですか？

アポロ「一兄、とりあえず寮にいきなさい」

一夏「そうだな。行くか！」

で、寮につきました！

アポロ「えーっと、一兄が、ここだね。1025室。僕は……1034室だね。じゃあ、いったんお別れだね、一兄」

一夏「そうだな、じゃ、お休みアポロ」

アポロ「お休み一兄」

で、1034室の前につきました。

………確か、相部屋だったっけ？誰かわからないけどノックしないと失礼だよね。

コンコンッ。

????『はい？誰ですか？』

あ、誰かいた。

アポロ「えーっと、織斑アポロです。先生から僕の部屋がここだと聞いたので来ました」

???『あ、あなたが同室になった人ですか。入っていいですよ』

大丈夫みたいだね。

アポロ「し、失礼します」

ドアを開けるとそこにはオルコットさんと違って少し薄めの金髪のロングヘアーと青色の目が特徴の女子がいた。

アポロ「確か同じクラスのレイ・アーンヴァルさん……でしたよね？」

アーンヴァル「はい！これからよろしくお願いしますね」

よかった、親しみやすい人みたいだ。

それにしても……

アポロ「うわぁ………すごい」

アーンヴァル「そうですね？私も初めて見たときはびっくりしました」

まず部屋に入って目に入っただのは大きめのベッド。それが二つ並んでいた。多分そこのビジネスホテルよりも質の良い物かも。それに窓からの眺めもすごくいい。本当に高級ホテルみたいだ！こういう

う所に泊まってみたかったんだ！

アポロ「うわぁ……………！（キラキラキラキラ）」

アーンヴァル「（すつごく目を光らせてる……………まるでかわいい子供みたいです）」

あ、そうだ。

アポロ「ベッド、どうします？アーンヴァルさんはどっちがいいですか？」

アーンヴァル「あ、それじゃあ窓側をお願いします」

アポロ「わかりました！」

荷物を置いて、ベッドにダイブ！

アポロ「すごいフカフカだぁ……………」

アーンヴァル「そうですね。多分すぐに眠くなっちゃいそうです」

アポロ「あはははは……………でも、まだ寝ませんよ。シャワーも浴びてませんし」

アーンヴァル「あ、シャワーですけど私が先に使ってもいいですか？」

アポロ「あ、わかりました。一応いるかいなかノックもしてみます」

うっかり入って裸を見ちゃったらいけないからね。

アポロ「へえ〜……………レイってイタリアの代表候補生なんだ」

レイ「はい、でも他にもすごい子がたくさんいますからまだまだですけどね」

アポロ「それでも代表候補生ってすごいよ！」

シャワーを浴びて僕とレイは少し談笑していた。

あ、レイには名前を呼んでもいいって言われたのでこちらも名前で呼んでいいって言ったよ？ 仲良く慣れて良かった。IS学園じゃまだ話し相手が全然いないからね。

レイ「ところで、アポロさん大丈夫ですか？」

アポロ「あ？」

レイ「意外にボケるんですねアポロさん。じゃなくって、オルコッ

トさんの事です」

アポロ「あー、そういえば忘れてた……………」

オルコットさんとの対戦の事忘れてた……

アポロ「まあ、専用機はあるんだけどね」

レイ「え！？あるんですか！？」

アポロ「まあね……………そうだ！レイ、訓練しない？」

レイ「訓練、ですか？」

アポロ「はい。レイさんも専用機持ってたよね？アリーナを借りて対戦しない？」

レイ「うーん……………確かに、そうですね。いろんな相手に慣れることも大切です。でもいいんですか？自分の手をさらすようなものですよ？私はいいですけど」

アポロ「全部さらす気はないよ。いきなり本気でドンパチやりあうわけじゃないしそれじゃあ、明日先生にアリーナを借りれるか聞いてみるよ」

レイ「借りれなかったらどうします？」

アポロ「借りれなかったら……………イメージトレーニングや教科書を読んだりなどいろいろまだあるからね」

レイ「アポロさん、よくそんなにアイデアが思いつきますね」

アポロ「あはははは……一兄にもよく言われるよ」

と、会話していたら結構時間が過ぎていた。

アポロ「それじゃあ、そろそろ寝る？」

レイ「そうですね、それじゃ電気切りますよ？」

アポロ「大丈夫だよ？おやすみなさい」

レイ「はい、おやすみなさい」

これにてIS学園の初日が終わった。

明日からどんなことがあるんだろうか。

ちよっとわくわくして楽しみである。

第三話 初日は意外に長い（後書き）

はい！レイ・アーンヴァルは「武装神姫バトルマスターズ」のアーンヴァルMK2です。名前はもう適当に着けました。
アポロ「アナザーは名前はアーンヴァルとか変えてないもんね」
変な名前になりそうだったからだよ。仕方ないじゃん。

では、次回予告！

《次回予告》

レイ「初めまして。レイ・アーンヴァルと申します！どうやらアポロさんと訓練をすることになりました。アポロさんは専用機を持っているそうですがどんな専用機なんでしょうか？とても気になります！次回、『訓練開始！』って、それがアポロさんの専用機なのですか！？」

第四話 訓練開始！（前書き）

はい、マラソンでは最初飛ばして後に疲れるように小説書きでも多分同じことになる気がするけど必ずゴールすることが目標のアナザーです。

最近の p s p が使えないことにだんだんとイライラ感じてきました。
あー、p s p イイイイイイイイイイイイ！

精神崩壊する前に！本編 g o ！

第四話 訓練開始！

——いつの事だろうか

そこは水晶に覆われていた。

そこには、二人の男女がいた

そこには翅^{はね}が舞っていた

男は真っ赤な長髪をしていた

女は黄色い髪でヘアバンドのような物を付けていた

二人はお互い見つめあい、そして抱き着きあった

その二人の、男から見たら右、女から見たら左には――――

――――巨大な純白の翅^{はね}を生やした金色の巨大な『太陽』
が、確かに存在した――――

まふし……

アポロSIDE

ん……………ああ……………

アポロ「……………ん……………あさ?……………」

レイ「あ、おはようございます、アポロさん。寝癖凄いですよ?」

アポロ「……………むう?……………そうなの……………」

レイ「大丈夫ですか? 凄く眠そうですけど?」

アポロ「……………ごめん……………ねおきはちょっとダメなんだ……………」

レイ「わかりました、髪の毛を解きますからちよつとじつとしてく
ださいね?」

アポロ「……………ん……………ありがとう、レイ」

アポロ「うん、おはようレイ」

レイ「おはようございます、アポロさん」

朝ちよつと寝ぼけてたけど今起きた。

アポロ「じゃあ、僕は着替えるからあっち向いてて」

レイ「あ、はい。わかりました」

さすがに着替えを見られるのは恥ずかしいからね。

あ、レイはもう着替えていたよ？

着替え完了！

アポロ「じゃあ、朝食取りに行かないとね」

レイ「そうですね行きましょう！」

今日の朝ごはんは何にしようかな？

??? 「あ、織斑アポロ君だ」

廊下を歩いて食堂に向かおうとしていたら名前を呼ばれた。

振り向くとまず黒髪の長髪で僕から見たら前髪の右の方に二つ髪留めを付けている女子と少し赤みのかかった髪で後ろで左右に縛って

いる女子とピカチュウ？じゃないよね？黄色い動物のような袖丈が異常に長い着ぐるみを着ている女子がいた。着ぐるみの子が色んな意味でとんでもなく気になる。

アポロ「えーっと、同じクラスの谷本美香さん、たにもとみか清水光莉さん、しみずひかり布の本音さん、ほとけほんねでしたよね」

柏木「うん、私は谷本美香」

清水「清水光莉だよ。よろしく」

布仏「よろしく、布仏本音だよー♪」

アポロ「改めてよろしく、三人とも。こっちは僕と同室になった」

レイ「はい、レイ・アーンヴァルです。よろしくお願いします」

柏木「よろしく、レイさん、織斑くん」

アポロ「あ、名前がいいよ。一兄とかぶるでしょ？」

清水「いいの？じゃあ、よろしくアポロ君」

布仏「よろしく、アポロン」

え？アポロン？それって、神様の名前じゃなかったっけ？

アポロ「えっと………布仏さん？アポロンって？」

布仏「アポロンはアポロンだよ」

レイ「愛称、みたいなものですか？」

清水「多分そうだと思うよ？私はミツカーだって」

柏木「私はヒカリンって呼ばれた」

レイ「私だったらどうなるのですか？」

布仏「んゝ、レイニーかなー？」

レイ「雨、ですよね？」

アポロ「あはははは………僕の事は好きに呼んでいいよ？」

布仏「じゃあゝ私たちの事も名前で呼んでいいよゝ♪」

アポロ「いいの？」

柏木「別にいいよ？友達だもんね」

アポロ「それじゃ、よろしくね、美香、光莉、本音」

本音「あ、私の事はさんでのほほんいいよゝ」

アポロ「それじゃあ、のほほんさん。皆食堂行くんだよね？早くいこ？」

美香「それもそうね。早く行きましょ」

さっそく友達が増えた。特にのほほんさん、凄く特徴的だった。アポロンって……………（苦笑）

はい、食堂に付いてご飯を乗せたトレイを持ってただ今席を探しています。

どっちかっていうと一兄探してるんだけどね？

男一人じゃさみしいからだよ。

あ、一兄発見。箒姉と二人で食べてるね。

お邪魔するのは悪いかな？

一夏「お、アポロ！こっちに来いよ！一緒に食べようぜ！」

あ、ゴメンね箒姉。見つかった。

アポロ「それじゃ、お邪魔します（ゴメンね？箒姉）」

箒「……………いい、気にするな」

箒姉もちよつと残念がってる。本当にゴメンね？

とりあえず一兄のお隣に皆でお邪魔します。

のほほん「わぁー、アポロンもだけど織斑くんって朝すっごい食べ

るんだ」

光莉「男の子だね」

一夏「というか女子って朝それだけしか食べないで平気なのか？」

美香「わ、私たちは、ねえ？」

光莉「う、うん。平気かなっ？」

のほほん「お菓子よく食べるしー」

……一兄？女の子にそんな事言っちゃ失礼だよ？

本当に女の子方面では鈍いんだから。

箒「……織斑、私は先に行くぞ」

一夏「ん？ああ。また後でな」

「織斑」？なんで「一夏」って呼ばないんだろう？

一兄また何かしたのかな？

光莉「織斑くんって、篠ノ之さんと仲がいいの？」

美香「お、同じ部屋だって聞いたけど」

一夏「ああ、まあ、幼馴染だし」

三人「え!?! 幼馴染!?!」

美香「え、それじゃあアポロ君も幼馴染?」

アポロ「うん、まあね」

確か剣道の全国大会で優勝したんだっけ? おめでとうってまだ言って無かったなあ。

パンパンっ!

突然、食堂に手を叩く音が響いた。

千冬「いつまで食べている! 食事は迅速に効率よく取れ! 遅刻したらグラウンドを十周させるぞ!」

そして千姉の声が食堂に響く。さっきの音も千姉だったんだね。

どうやら千姉は一年生の両長も務めているらしい。ワーカーホリツク気味に見えるから少し心配だ。

って! 早く食べないと時間がない!

早く食べないと!

食事を終えて二時間目が終わったよ。僕は大丈夫だけど……

一夏「……………」

一兄がグロッキー状態です。

いつか頭から煙が出るんじゃないかって思う。ホントになったら困るけど。

二時限目で一兄は腕を組んで教科書とにらみ合ってる。そんなことをしても当然のように授業は進んでいく。山田先生は時々詰まりながらも、僕たち生徒にISの基礎知識を教えてくれていた。

それで、ただ今四時限目が始まった。

その時千姉が前に出る。

千冬「織斑兄、お前のISだが準備まで時間がかかるぞ」

一夏「へ？」

千冬「予備の機体がない。だから、学園で専用機を用意するそうだ」

と、見事な大胆爆弾発言。

女子1「専用機！？一年のこの時期に！？」

女子2「それって、政府からの支援が出るってこと？」

女子3「すごいなあ、あたしも早く専用機欲しいなあ」

まあ、大体驚く理由はわかる。入学したてのただの一年生に専用機を渡すことなんてないからね。「ただ」の一年生にはね。

一夏「専用機があるってそんなにすごいのか？」

アポロ「一兄？簡単に4つで説明するよ？

1. ISは世界に467機しか存在しない。
2. ISのコアってパーツは篠ノ之博士以外制作できない。そして博士はもうコアは作っていない。
3. 一兄は特別待遇。

ということだよ。まあ、特別待遇をかなり悪く言えば『モルモット実験動物』
だけだね」

一夏「わざわざ悪く言わなくていいだろ……」

アポロ「でも、一兄？その現実だけはちゃんと受け止めてね」

一夏「ああ、わかった。現実は見ないとな。ところでアポロはどうして専用機がもらえないんだ？」

アポロ「あ、言って無かったっけ？僕は専用機を持ってるんだよ？」

一夏「は？いつ？」

アポロ「実はここに来る前からね。あ、どうしてとか聞かないでね？人には知られたくないこととかあるから」

一夏「あ、ああ。びっくりしたけど。聞かれたくないのを無理に聞

く気はないからな」

と、一兄と話していると。

女子4「あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……？」

女子の一人がおずおずと千姉に質問する。

千冬「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

『ええ〜!!?』

大きな驚きの声と共に視線が箒姉に集中する。

まあ、そんな有名人の妹がいると普通は驚くよね。

というか千姉は個人情報をそんな簡単にばらしてよかったの？

女子5「嘘!?!お姉さんの!?!」

女子6「篠ノ之葉加瀬って今行方不明で世界中の国や企業が捜してるんですよ？」

女子7「どこにいるかわからないの？」

とわいわい騒ぐクラスに箒姉は痺れを切らしたのか、

箒「あの人は関係ない!」

大きな声を出す。その声は先ほどまで騒いでいたクラスの皆を静まらせた。

箒「私はあの人じゃない。教えられるようなことは何もない」

そう言って窓側を向いてしまった。

千冬「……山田先生、授業を」

静まり返ったクラスの中で千姉が山田先生に授業の開始を言う。

山田「は、はい！授業を始めます！」

さて、放課後になったけど………

レイ「アリーナは明日から、ですか？」

アポロ「うん。今日は駄目だけど明日からは大丈夫、って織斑先生

が言ってたから」

レイ「でも、これで訓練はできるってことですよね」

アポロ「そうだね。んー、今日は………そうだ」

レイ「何か思いついたんですか？」

アポロ「うん、まあね。確か一兄と箒姉が剣道場で稽古するって言ってた。ちよっと見学してみようと思って」

レイ「見学、ですか？そうですね。見ることによって学ぶこともあるはずです」

うん。一番はすることだけと見ることも練習の一つ。剣道で何か見つけれるかもしれないし。

アポロ「それじゃあ、行ってみよ」

で、剣道場についたけど。

箒「鍛え直す」

ついでからいきなり箒姉が物騒なことを言っていた。

アポロ「ねえ、二人とも。いったいどうしたの？」

箒「アポロか。一夏がすっかり弱くなっているから鍛え直すという事だ」

一夏「ちょ、待ってくれよ！俺はISのことを」

箒「だから！IS以前の問題だ！これから毎日放課後三時間、私が稽古をつけてやる！」

一夏「な！？ちょ、アポロからも何か言ってくれよ！」

レイ「えーっと、どうします？アポロさん」

うーん……………

アポロ「まあ、毎日はやめておいた方がいいけど剣道の訓練は間違っていないと思うよ？」

箒「そうだろう！」

アポロ「だけど箒姉？毎日はダメ。いきなりの過度な練習は逆に危険につながるよ？最初にまた剣に慣れてもらってからの方がいいよ。剣の型がダメだったらそれが問題になるし」

一夏「で、でもISはどうするんだ？」

アポロ「ISが動かしても戦えなければ意味は無いよ？一兄は銃が

使えないでしょ？」

一夏「う、ま、まあ……」

アポロ「それなら折角身近に経験者もいるんだから剣の練習をした方がいいんじゃないかな？もちろんISの訓練もちゃんと組み込んでよね？使用する訓練機は「打鉄」にしてね。剣が主体だから。たとえ訓練機を借りなくても知識とかもあるからね。それじゃあ、頑張ってね？」

一夏「ん？アポロはどうするんだ？」

アポロ「僕は明日から訓練する。今日は……教科書を読んだりかな？」

まずは復習しないとね。

一夏「そうか。あ、そうだ、たまに勉強教えてくれないか？」

アポロ「途中退席しないならね？」

一夏「う……わ、わかった」

一兄は突っかかったら逃げ出しちゃう癖があるからね。甘やかしてばかりはいけない。時には心を鬼にせねば。

アポロ「それじゃあ、僕たちは戻るね？」

一夏「あ、そういえば、その隣の子は誰なんだ？」

あ、紹介してなかったね。

レイ「私はレイ・アーンヴァルといいます」

アポロ「レイは僕のルームメイトなんだよ」

一夏「そうなのか？俺は織斑一夏。アポロをよろしくな」

箒「私は篠ノ之箒だ。よろしく、アーンヴァル」

レイ「レイで結構ですよ？」

箒「そうか、それでは改めてよろしくな、レイ。私の事も箒でかまわない」

一夏「俺も一夏でいいぞ」

レイ「はい。よろしくお願いします、一夏さん、箒さん！」

さっそく仲良く慣れた。うんうん、いいことだね。

アポロ「それじゃ、僕たちは戻るね？（箒姉？あんまり一兄に無茶させちゃだめだよ？ちゃんと休憩もはさんであげてね？）」

箒「ああ、ではな（わかっている。助言助かる）」

一兄もいい加減箒姉の事に気づいてあげればいいのになー……………

というわけで次の日の放課後。

すっ飛ばしすぎとか言わないでほしい。

アリーナ内にはISスーツに着替えた僕とレイがいる。

《解説》

アポロのISスーツは「創聖のアクエリオン」でアクエリオン搭乗時に着るスーツで色は青色。

レイは「武装神姫BATTLE MASTERS」でのアーンヴァ

ルMK2が着ている服装。

《解説終了》

レイ「それじゃあ、展開しますね」

レイがそう言った瞬間にレイの左手の人差し指にはめている白い純白の指輪が光り、体から光の粒子が解放されるように溢れて、再結集するようにまとまりそこには白色のISに乗ったレイがいた。

《再び解説》

レイのISの見た目は

ヘッドセンサーユニコーン+GC

FL016チェストガード+GC

FL016Lガントレット+GC

LGパピオン+GC

RU・シンペタラス+GC

ディコ・シールド+GC

です。

MK2をまだあまり武装獲得していないのでしばらくはバトマスの無印の装備です。

《解説終了》

アポロ「それが、レイの専用IS」

レイ「はい！『グランニューレ』と言います！」

アポロ「それじゃあ、僕も……」

僕の待機状態は赤、青、緑の三つの宝石の付いたネックレス。

その三つの宝石がそれぞれの色で光る。

アポロ「(……………来い……………マーズ……………)」

僕がそう念じると赤と緑の光よりも青の光がはるかに強くなり僕の体を包む。

そして、僕の体を包む光は晴れる。

レイ「……………フル・スキン全身装甲……………？これがアポロさんのISですか？」

レイが驚くのも無理ないかもね？全身装甲のISなんて珍しいからね。

アポロ「うん、これが僕の専用機……………『アクエリオン』だよ」

第四話 訓練開始！（後書き）

はあ、はあ、前書きでテンションあげすぎた……………

ところで転生者を出そうと思っっているときにこんな質問もおかしいと思いますがこれを見ている皆さんに質問です。

皆さんは転生についてどう思いますか？

寿命を終える、神のミス、誰かを庇ってなどいろいろありますが、死んでからもう一度人生を別世界で始める。このことに皆様はどう思いでしょうか？

まあ、暇でしたら書いてください。

少し参考にさせていただきます。

では！次回予告！

《次回予告》

レイ「アポロさんのIS………いったいどんな戦法をとるのが気になるですね」

アポロ「レイのISのはどんな攻撃を仕掛けてくるのだろうか」

レイ「では！」

アポロ「勝負！」

レイ、アポロ「次回！『バトルスタート戦闘開始！』」

アポロ「あ、でも模擬戦ってこと忘れないでよね？」

レイ「え？は、はい！ももも、もちろんじゃないですか！」

アポロ「アレ？意外に戦闘狂？」

第五話 戦闘開始（バトルスタート）！（前書き）

おはこんばんにちわ、アナザーです。この話の投稿時刻は深夜ですがね。

特に話すことなし！

では、本編go！

第五話 戦闘開始（バトルスタート）！

レイSIDE

アポロさんの専用IS……

それは青色を基準とした全身装甲の人間の形をしたISだった。

今まででこんなISは初めて見た。

一体どんなISなんだろう……？

とても気になります……

アポロ「それじゃあ、まずは起動練習するから」

レイ「あ、私もいいですか？」

アポロ「いいよ」

レイ「所ですけど……そのISは飛べるんですか？」

とても気になります。背中にもパーツがありますけどブースターの

なものは脚部にも見られません。どうやって飛ぶのでしょうか？

アポロ「大丈夫だよ。一応背中にブースターがあるけど飛ぶことにはあんまり使用しないけどね。回避やダッシュに使うからね」

レイ「そう言われると余計にどうやって飛ぶかが気になるんですけど……」

アポロ「気にしない気にしない。それじゃ、論より証拠」

そう言うのアポロさんのISは真上に向かってゆっくりと上昇した。本当にどうやって飛んでいるんでしょうか？

アポロ「レイ？どうしたの？」

レイ「あ、すみません。今行きます！」

私も急いでアポロさんのいる高さまで上昇する。

アポロ「うーん……もうちょっと飛んでいい？」

レイ「はい、いいですよ」

アポロ「ありがと、それじゃ」

アポロさんはアリーナを軽く飛んでいる。確かに背中に一つあるブースターを使用しているけど見た限りの出力と速度が割に合っていない。本当にどんな機体なんでしょう？

暫くしてアポロさんが通信回線を使ってきた。

アポロ「もう大丈夫、いつでも模擬戦できるよ。レイは大丈夫？」

レイ「あ、はい！私も大丈夫です！」

アポロ「それじゃ……」

アポロさんがどれくらい強いかはわかりませんが、油断はできません。

レイ「……行きます！」

第三者SIDE

始めに動いたのはレイだった。

レイは『LC5レーザーライフル+GR』というライフルを取り出しアポロに構え、引き金を引く。

レイ「先手必勝です！」

レイは休む間もなくライフルの引き金を引き続け銃弾をアポロに向けて放つ。

が、

アポロ「当たらないよ！」

アポロは迫りくる銃弾を一つ一つを確実に回避する。

ISでの戦いは空中戦が主なのでその為高速アクロバティックな戦いになる。ISだからこそ可能なその戦闘は回避方法、攻撃方法も多彩だ。

レイ「（先ほどからアポロさんは攻撃してこない？ いったい何故？）」

レイの考えている通り、アポロは先ほどから避けてばかりで攻撃はおろか近づこうともしない。そう考えていたとき、

アポロ「それじゃ……そろそろ攻撃に転じさせてもらおうよ！」

アポロがそういうとともにアクエリオンの手に光が集まり光が消えた時には一つの剣が握られていた。

青色一色のその剣は『星空剣』。

アポロ「行くよ！」

その剣を右手に確かに握ってアポロはレイに接近する。

当然そう簡単に近づかせるわけがなく、

レイ「させません！」

レイは迫りくるアポロに対してさらに銃弾を放つ。

が、

レイ「（早い！避けるスピードと接近する速さがさっきと違う！）」

そう、銃弾をカクカクと最低限の動きで避けてレイに確実に接近するアポロ。

しかし、レイもさすが代表候補生と言うべきか、即座に思考を切り替える。

レイ「接近戦なら私も得意です！」

レイは即座にLC5を戻して片手剣である『M8ライトセイバー＋GR』を展開し右手に持ち、アポロに対応する。

ガキーン！

剣と剣がぶつかり合う音がアリーナに響く！

アポロ「まさか……剣も使えたんだね……！」

レイ「私の戦闘は遠距離近距離どちらにも対応していますッ！」

空中で鏢迫り合いを繰り広げる二人。が、もちろんその終わりは訪れる。

アポロ「……ッ！」

アポロがすぐさまにレイから離れる。

アポロ「……危なかった」

レイ「よくわかりましたね」

レイの左手にはハンドガン『アルヴォPDW11+GR』が握られていた。鏢迫り合いの時にアルヴォを取り出しゼロ距離射撃を行おうとしたのだ。

が、そこでアポロは間一髪気が付いたのか回避のために離脱したのだ。

アポロ「（技は無しにしようと思ったけど………）ちょっとだけ本気で行くよ？」

レイ「模擬戦で相手に手の内をさらす気ですか？」

アポロ「ちょっとだけ（それに一個ぐらいいいでしょ）」

アポロはそういつて星空剣の剣先をレイに向ける。

レイ「（本気……いったい何を？）」

そうレイが考えた瞬間だった。

アポロ「（いくよ………!）」

ロングレンジセイバー!」

レイ「えっ!？」

アポロは剣でレイを突くように突きだした瞬間にアポロの星空剣の刀身が伸びたのだ。

狙いは右肩。

レイもさすがに驚きは隠せなかったが何とか回避して当たりはしたものの直撃は免れた。そして星空剣は元の長さへと戻った。

レイ「（まさか……剣が伸びるなんて……これが『ちょっとだけ本気』だなんて……）」

レイは少しぞっとした。例も模擬戦とはいえ少し力を入れていたがそれを上回るアポロの『ちょっとだけ本気』。本気だったら一体どうなっていただろうか………

アポロ「考えている暇はないよ！」

レイ「！」

考えていたときにはすでにアポロが接近していた。

レイはすぐさまライトセイバーで応戦する。

レイ「（距離はどちらでも可能というわけですか……あまり手の内を見せることは避けるべきですね。ライフルとハンドガンとセイバーで応戦します！）」

アポロ「うわっと！」

レイは近接戦闘を仕掛けてくるアポロをハンドガンで牽制する。

近距離での発砲を避けるためにアポロは少し距離を取る。

アポロ「（ハンドガンの弾速は思ったより早いね……さすが代表候補生）まだまだ行くよ！」

レイ「こっちですよ！」

その後にもしばらくアリーナには剣をぶつけ合う音と銃声が響いていた。

アポロSIDE

アポロ「ふう……………レイ、やっぱり強いね。さすが代表候補生」

レイ「その代表候補生と互角に渡り合うあなたは本当に初心者かどうか気がなりますけど……………」

アポロ「うーん、まあ、練習はしていたからね」

正直ハンドガンなどは焦った。油断したら結構もらっていたかもしれない。

アポロ「汗結構書いちゃったな……………」

レイ「そうですね……あ、先にシャワー使います？」

アポロ「ううん、レイが先に使っていていいよ」

レイ「え？でも……」

アポロ「レディーファースト、僕は後でいいから」

レイ「……わかりました、ありがとうございますね」

アポロ「どういたしまして」

僕たちはお互い更衣室へと戻った。

レイSIDE

強かった……

ただ、その一言に尽きますね。

動きもISに流されていなかった。まるで本当の自分の体のように扱っていました。

私も彼と練習すればもっとうまくなるのでしょうか？

これからアポロさんに頼んで訓練するべきでしょうか？

その前にアポロさんが普段どんな訓練をしていたか聞くべきでしょうか？

とにかく、私もがんばらないといけませんね。

いつかアポロさんの本気を見て見たいですしね。

私はシャワーを浴びながらそう考えていた。

アポロSIDE

レイ「アポロさん、アポロさんならこの状況ではどうしますか？」

アポロ「僕がレイだったらライフルで牽制する。あ、でもやたらめったらはダメ。確実に足止めする形で狙う」

レイ「なるほど………参考になります！」

訓練が終わった後、部屋で僕とレイはISの戦闘について話していた。なんでも参考にしたとか。僕の戦法なんて参考にならないと思うんだけどなあ。実際に使えなかったら意味ないし。

ガチャッ

のほほん「おーっす、アポロンにレイニー、お菓子食べに来たよ♪」

アポロ「のほほんさん、せめてノックはしてよ。別にいいけど。はい、今日はポテトチップス、ちなみにうす塩」

のほほん「わーい、ありがとね」

レイ「あはははは………本当にお菓子が好きですね、のほほんさんは」

たまにのほほんさんがお菓子を食べによく食べに来るのだ。好物は

ポテトチップスらしい。ちなみに今回のぬいぐるみはチョコボだ。尻尾が動いているのは気のせいだと思う。うん、気のせいだ。

のほほん「アーポローン♪」

とのほほんさんが背中中にのしかかってきた。何故か懐かれたのだ。

レイ「懐かれていますね、アポロさん」

アポロ「何か餌付けした気分だよ……」

のほほん「そんなことないよ、普通にアポロンを気に入ってるんだよ♪」

レイ「ほら、懐かれてるじゃないですか」

アポロ「そうかな？」

とかさつきから器用にニャーって鳴きまねしてるけど、一応見た目はチョコボなんだからね？まあ、チョコボの鳴き声忘れちゃったけど。

と、試合までの訓練はこんな感じでやっていた。

ところで一兄たちはどんな訓練をしたのだろうか？

第五話 戦闘開始（バトルスタート）！（後書き）

のほんさんのコスプレって考えるのに以外に疲れます。今回はチョコボにしましたが……………

それと一応ですが必殺技について説明しときます。

…ロングレンジセイバー

星空県の刀身部分を如意棒のように伸ばす技。その伸びる勢いで相手を突くことが可能。スパロボやACEでも使用された技。スパロボだと突いた後何度も突いて最後に突き刺す。突き刺した敵を空に投げ自分も向かい横一線という感じになっている。今作では刀身を伸ばした後に切るなど様々な動作を可能という設定にしている。

って感じですかね？今回は原作に出てる技ですが多分これからオリジナル技が出ると思います。

では、次回予告！

《次回予告》

光莉 「いきなり始まったクラス代表めぐっての対決！」

レイ 「アポロさん、大丈夫でしょうか？」

光莉 「大丈夫大丈夫！アポロ君なら何とかしてくれるって！」

美香「でも相手は代表候補生、どうやって勝つのか！」

のほほん「がんばれがんばれア〜ポ〜ロ〜ン！」

四人「次回、『蒼き雫と蒼き星』！」

光莉「ところで織斑君の専用機は？」

三人「あ」

第六話 蒼き雫と蒼き星（前書き）

はい、今日体育の授業の柔道で背負い投げ、大外狩り、一本背負い、寝技をかけられ体の節々がいたいアナザーです。

皆様、もう体がぼっこぼこです。ただでさえ昨夜は精神的にきつかったのに（活動報告の「ヤベえ、意外に傷つく……………」をご覧ください。）……………。

では、本編 go……………

ps、pvアクセス10000超えとった……………

第六話 蒼き雫と蒼き星

一夏SIDE

よ、織斑一夏だ。

というわけで、（どんなわけだ？）セシリアとの対決の日。

とりあえず疑問が一つ。

一夏「なあ、箒」

箒「なんだ、一夏」

一夏「ISの事を教えてくれるって話だったよな？」

箒「…………（そっぽを向く）」

一夏「目・を・そ・ら・す・な」

そう、ISについて何も教えてもらっていないのだ。

一夏「一週間、剣道の稽古しかなかったじゃないか」

箒「し、仕方がないだろう。お前のISはまだ届いていないのだから……」

一夏「アポロだって言ってたじゃないか！知識とか他にも基本的な事とかあるだろ！」

箒「……………（汗）」

一夏「だ・か・ら・目・を・そ・ら・す・な・！」

どうする……………ぶっちゃけアポロは剣道も必要とか言ってたけど不安だ。

アポロ「……………遅いね」

レイ「……………遅いですね」

アポロ「一兄の専用機はいつ来るんだろう？」

レイ「オルコットさんはもう準備してますからね」

そう、俺専用ISは何かごたついてるらしく今もまだ来ていない。

山田「あ、織斑くん！」

と、俺の専用機を待っていたら山田先生が来た。

一夏「どうしたんですか、山田先生？」

山田「えっと、織斑くんの専用ISですがまだ来ないようでありナも使用できる時間が限られていますので先にアポロ君がオルコツトさんと対戦を行うようにします」

どうやら俺の専用機がまだ来ないようだ。それに時間も押しているようなのでアポロが先に対戦するみたいだな。

アポロ「わかりました、ありがとうございます」

山田「はい、頑張ってくださいね」

アポロ、大丈夫か？怪我しなければいいんだけど。

千冬「織斑弟」

今度は千冬姉がアポロに話しかけてきた。

千冬「先ほど言った通り織斑兄のISがまだ来ないためお前が先に対戦することになった。準備はいいか？」

アポロ「あ、はい。大丈夫です！いつでも行けます！」

千冬「わかった、それでは行け」

アポロ「はい！」

そうアポロが言うと同時にアポロがいつも肌身離さずつけていたネックスについている赤、青、緑色の宝石がそれぞれの色に光りだした。もしかして、あれがアポロの専用ISだったのか！？

そして、青色の光が強くなり光が消えた時にはアポロはISを装備していた。

アポロの面影も見えない青色を基準としたISだった。

一夏「それが……アポロのISか？」

アポロ「うん、『アクエリオン』っていうんだ」

レイ「頑張ってきてくださいね、アポロさん！」

アポロ「うん、じゃあ行ってくる！」

そしてアポロはピットからアリーナへと飛んで向かった。

山田「あれが……アポロ君のISですか？織斑先生」

千冬「ああ、私も初めて見たときは少し驚いたがな」

頑張れよ、アポロ！

アポロSIDE

と、僕はピットから空へと飛び立った。そこにはオルコットさんが待機していた。

オルコット「な、なんですの？そのISは……」

あ、全身装甲のISって珍しいんだっけ？

アポロ「あ、僕です。織斑アポロです」

オルコット「そ、そうですか。逃げたかと思いましたわ」

アポロ「まあ、逃げるつもりはないからね」

鮮やかな青色の機体『ブルー・ティアーズ』を身に纏っているオルコットさん。その手には二メートル以上はあるレーザーライフル『スターライトMK2』が握られている。

遠距離射撃タイプかな？

もう試合開始の鐘は鳴っている。いつ撃ってきてもおかしくないからね、警戒は常にしとかないと。

オルコット「最後のチャンスを上げますわ」

腰に手を僕の方にびっ、と人差し指を突きだした状態で向けてくる。

左手の銃は余裕なのか銃口を下けている。

アポロ「チャンスって？」

オルコット「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、ぼろぼろのみじめな姿をさらしたくなければ、今ここで誤ると
いうのなら、許してあげないこともなくってよ」

アポロ「そんなのはチャンスって言わないよ？………というか僕、
何かしたっけ？「やってみないと分からないよ？」って啖呵切った
以外何も言っていない気がするよ？というかそれって僕の兄に對し
てじゃない？」

オルコット「……………そ、そう？残念ですわ。折角のチャンスを
無駄にするなんて（汗）」

アポロ「あ、ごまかした」

オルコット「うるさいですわ！お別れです！」

キューインツ！

アポロ「あぶなっ！」

確かに試合は始まってんだけどこの開始は無いと思う！

オルコットさんは休む間もなく次々と弾丸を放つ。例のライフルよりも弾速が速い。おそらくただけで威力も若干高いと思われる。

でも、回避は不可能な事じゃない！

オルコット「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

アポロ「ゴメンね！あんまりダンスとかは得意じゃないんだ！」

まさに弾丸を雨のように降らせるオルコットさん。

的確にこちらを狙ってきてるね。でも、ワンパターンすぎる。決して避ける方向を先読みするなど射撃ペースも同じ。攻撃パターンも同じことばかりすれば対策を練られる。

とりあえず！

アポロ「よっと！」

今は避けることに専念！

オルコット「わたくしのブルー・ティアーズを前に初見でここまで避けきったのはあなたが初めてですわね。褒めて差し上げますわ」

アポロ「どうも……つと」

オルコット「では、閉幕^{フィナーレ}と参りましょう！」

オルコットさんは笑みと共に右腕を横にかざす。そして、オルコッ

トさんのそばに浮いていた自立起動兵器のような武装が四つこちらに接近してくる。見た限りビットだろう。銃口をこちらに向けているからね。そして銃口からレーザーが放たれる。

アポロ「にしてもっ！」

このビットは厄介だ！もしかしてさっきの射撃は僕の回避パターンを読むための？だとしたらマズイね…………パターンを読まれるのは最悪だ。

アポロ「左足、いただきますわ！」

と、ビットの銃撃がやんだ瞬間にオルコットさんはライフルをこちらに構えていた。

…………しかたない。

バシユンッ！

オルコットさんのライフルからレーザーが放たれる。

対する僕は……………技を使う！

アクエリオンの右足に白い何かが包みこまれる。そして！

アポロ 「^{リフレクト}反射………^{シュート}蹴！」

オルコットさんのライフルから放たれたレーザーを右足で蹴る！

一夏SIDE

…………正直驚いた。

今、アポロのISの左足に何かが纏わってセシリアのレーザーを………蹴ってセシリアに返しやがった。サッカーのボレーシュートのように。そしてレーザーはセシリアに直撃したのだ。

山田「お、織斑先生！？今のは……！？」

山田先生も驚いている。そりゃあレーザーを蹴って返すなんて普通はあり得ないだろ。

千冬「落ち着け、山田先生。アレは………必殺技だ」

は………？必殺技？アレか？漫画とかでよくあるアレか？

千冬「アポロのISは武装がほとんどない。だが、アポロのIS、『アクエリオン』には必殺技がある。アポロはそれを駆使して戦闘する。もちろん必殺技なんて便利なものがそんなに放てるわけがない。きちんと制限、簡単に言うと「リミットポイント」がある。つまりポイントが尽き、必殺技が使えなくなるとかなり危うい状態になる。私も何個かは見せてもらったがな。最初は疑ったさ」

山田「そんなISが………」

レイ「それに、必殺技も沢山ありますよね」

千冬「その通りだ、アーンヴァル。訓練で知ったか？」

レイ「はい、アポロさんに教えてもらって訓練中に二つそれらしきもの使ってきました。その一つがあれです」

箒「織斑先生。今のは一体………」

と、箒が千冬姉に質問する。

千冬「今のは『リフレクトシユート反射蹴』。文字通り反射する蹴りだ。だが、反射判定は一回。すぐに発動できる技ではないし消費するポイントも多い。何より弾き返せるのは銃弾などの遠距離攻撃限定だ。拳など近接攻撃は無意味、蹴りよりも威力が大きい攻撃は反射できないという欠点がある」

山田「必殺技が絶対強いわけではないんですね」

千冬「その通りだ。アポロは教えてくれなかったがまだまだあるよ
うだ」

一夏「どれだけあるんだ……?」

気になるぞ?

セシリア「な、なんですの？今は……」

アポロ「敵に簡単に教えるわけじゃないじゃん」

セシリアは少し焦っていた。もし、今の蹴りをまたやられたらどうなる？こちらが撃つたびにまた弾丸がこちらに飛んできて直撃するなんてシャレにならない。

が、セシリアの考えている時、アポロも考えていた。

アポロ「(さっきの一発はただのハツタリ。実際は消費ポイントが結構あるし連続でやられたらたまったものじゃない。それにビットも反撃のための可能性がある。頼む………想定通りになつてくれ………!)」

こちらもある仮説をセシリアに立てている。

そして、先に動いたのは、

セシリア「(このまま待っていても拉致が明きませんわ!)行きま
すわよ!」

セシリアだった。

セシリアは四つのビットを再びアポロに向かわせる。

対するアポロは『反射蹴』を使わずに避ける。ただ、セシリアを「観察」して避ける。

アポロ「（やっぱり、正解かな？……よし！試してみよう、来い！星空剣！」

アポロは念じることで星空剣を取り出し、

セシリアに突撃する！

セシリア「なっ！？突撃！？ですが！中距離射撃型のわたくしに、近距離格闘戦を挑もうだなんて……笑止ですわ！」

セシリアは好機とばかりにビットの攻撃を強める。

が、対するアポロは放たれるレーザーを避けようとはしない。『反射蹴』をするわけでもない。

ただ、レーザーを、

アポロ「攻撃こそ最大の防御だ！」

斬る！

斬る！

斬る！

こちらに来るレーザーを切り払いつつセシリアへと接近する！

アポロ「（やっぱり……：オルコットさんのビットは自分が直接命令を送らない限り動かない。つまり、意識を集中しなければならないから他の攻撃ができないんだ！それにオルコットさんは僕の反応が一番遠い角度を狙ってくる。パターンさえわかれば問題ない！）」

そう、アポロの読み通りセシリアはビットを操作しつつ他の行動をとることはできない。

それにISは360度見渡すことができるためレーザーがどこから来るかわかる。わかるならそこを切り払えばいい。

更にセシリアのビットの使い方まで見切ったのだ。セシリアは常に相手を追い込むパターンを決めていてそれをビット攻撃として使用している。つまりパターンがある。パターンさえ覚えれば見切るのは楽勝だ。

そしてアポロはセシリアに接近し、

アポロ「そこだっ！」

アポロはセシリアに切りにかかる！

セシリア「くっ！『インターセプター』！」

セシリアは辛うじて近接戦闘用のナイフを取り出して防ぐ。が、アポロの攻撃手段はまだある！

アポロ「たあっ！」

セシリア「え？キャアッ！」

そう、「蹴り」だ！

アポロはセシリアが剣を受け止めている時に体制を少し変えセシリアの横腹あたりに蹴りを放つ。

上手く当たったのか少し横へ吹き飛ぶセシリア。だが、彼女もさすがは代表候補生。すぐさま体勢を立て直し次の攻撃準備に移る！

セシリア「クッ、よくもやってくれましたわね！」

そして、セシリアは蹴られた怒りのあまりに『反射蹴』の事を忘れライフを放ってしまう。

アポロ「（チャンス！）反射……蹴ッ！」

セシリア「しまっ、うッ！」

油断したのかセシリアはまた反射蹴によって返されたレーザーを受けてしまう。

アポロ「まだまだ！」

そしてアポロは星空剣を構えセシリアに突撃する。

しかし、セシリアにはまだ切り札があった。

セシリア「まだなのはこちらの台詞ですわ！」

セシリアのブルー・ティアーズの腹部から広がっているスカート状のアーマー。その突起が外れて動き、アポロへ向いた。

そして放たれたのは……ミサイルだ。

ミサイルはいくら「反射蹴」だとしても触れただけでもアウトだろう。セシリアはこの一撃を入れるために結構ダメージを受けたが距離をちょうどいいところまで詰めさせたのだ。

しかし、

アポロ「残念！ ロングレンジセイバーッ！」

アポロには必殺技がある。

星空剣は刀身が伸び、放たれたミサイル二つをまとめてすぐさま横一閃。

ミサイルはアポロの当たらず爆破した。

さらに、だ。

セシリア「（！爆風で前が見えない！）」

そう、アポロよりもセシリアの方がミサイルに近く爆風で視界を奪われたのだ。

そこで止まってしまったのはセシリアの大きなミスだった。

セシリア「！」

爆風を突きぬけてセシリアの目の前に出てきたのはセシリアを斬る体制に入っているアクエリオン、アポロだ。

アポロ「とどめだよ！」

その言葉通りアポロはセシリアへと振り下ろした星空剣は見事セシリアのブルー・ティアーズのシールドエネルギーをゼロにした。

そして、決着を告げるブザーがアリーナに鳴り響いた。

『試合終了。勝者————織斑アポロ』

アポロ「大丈夫？オルコットさん？」

オルコット「……………」

アレ…………？どうしたんだろう？

アポロ「オルコットさん！」

オルコット「は、はい！」

あ、ちょっと大声出しすぎたかな？

アポロ「大丈夫？」

オルコット「あ、は、はい。大丈夫です」

アポロ「そう…………よかった。じゃあ、はい」

そう言って僕は手を出す。

オルコット「へ？」

アポロ「試合、ありがとう。またやろうね」

オルコット「あ、はい。こちらこそありがとうございました」

そう言って僕とオルコットさんは握手した。

一夏SIDE

すげえ……アポロの奴、勝ちやがった……

必殺技とかちよつと驚いたけど、あいつ操縦上手いんだな……

と、考えに浸っていたら

山田「！来ました！織斑くんの専用IS！」

どうやら俺のISが今来たようだ。

そして、ごごんっ、鈍い音がして、ピット搬入口が開く。斜めに噛み合うタイプの防壁扉は、思い駆動音を響かせながらゆっくりとその向こう側を晒していく。

———そこに、『白』が、いた。

白、真っ白。飾り気のない、無の色。眩しいほどの純白を纏ったI
Sが、その装甲を解放して操縦者を待っていた。

一夏「これが……」

山田「はい！織斑くんの専用IS『びやくしき白式』です！」

第六話 蒼き雫と蒼き星（後書き）

はい、セシリアに勝っちゃったアポロ君です。

そして今回初登場したオリジナル必殺技、「リフレクトシユート反射蹴」の説明です。

リフレクトシユート
…反射蹴

レーザーなど飛び道具を蹴ることによって反射できる技。

だが、ミサイル等の着弾することで爆破する兵器は無理。

そして拳などの格闘戦では意味なし。

蹴りよりも威力が強い場合も意味なし。

判定が一回だけな為マシンガンなどにはしないほうが得策。

と、こんな感じです。

どこぞのとあるの一方通行のような便利機能はございません。

では、次回予告！

《次回予告》

一夏「白式……これが俺専用のISか………」

箒「一夏、油断するなよ。アポロは剣に関しても強かったからな」

一夏「ああ、でも負ける気はねえ！」

一夏、箒「次回、『しらゆき すいげつ白雪と翠月』」

レイ「ところで一夏さん。ISの操縦できるんですか？」

一夏「あ……………」

箒「気にしたら負けだ」

第七話 白雪（しらゆき）と翠月（すいげつ）（前書き）

はい、アナザーです。

皆様、俺、風邪ひきました。ですが出席日数とか別にヤバくないけどできる限り休みたくないなので学校はしっかり登校しています。と
いうかいきなり寒くなりすぎ。

皆様も気を付けてください。

では、ちょっと不調だけど本編 go！

第七話 白雪（しらゆき）と翠月（すいげつ）

アポロSIDE

千冬『織斑弟、このまま続けて織斑兄と対戦してもらおう。オルコットをピットに戻してからそこで待機しろ』

試合終了後、指令が来たのでオルコットさんをピットに連れて行ったら後に僕はアリーナの中心で待機している。

一兄の専用機が来たらしいけど……………

そう考えているとピットから一つの白いISが飛んできた。顔を見ると一兄だった。

一夏「待たせたな」

アポロ「それは素じゃなくってネタだね」

一夏「相変わらず洞察力あるよな……………」

某蛇のような言い方されても反応に困るんだけど……

それにしても……………

一兄のIS……………まさに白だね……………うん。

そう考えていると千姉から通信が入った。

千冬『聞こえるか？アポロ』

あ、名前で呼んでる。

アポロ『うん、聞こえるよ、千姉』

千冬『で、一夏との対戦だが、『ルナ』で行ってほしい』

……………え？

アポロ『ち、千姉？…どうということ？』

千冬『もしお前が『マーズ』で戦闘したら近距離戦闘しかできないだろう』

あ、見当がついた。

アポロ『一兄の訓練だね』

千冬『その通りだ。『ルナ』なら遠距離が基本だが近接戦闘も可能だ。一夏の良い訓練になる』

確かに……………

アポロ『わかったけど、後で皆に説明しないといけないよ?』

千冬『私からする。そもそもお前の事だからすぐに使うだろう』

よくご存じで。さすが千姉だよ。

アポロ『うん、わかった。ありがとうね』

千冬『必殺技は二つまでだ』

二つね……………うん。

一夏SIDE

さっきからアポロがISを起動するそぶりも見せない。どうしたんだ？

一夏「どうした？アポロ。IS展開しないのか？」

アポロ「うん。今展開するよ」

アポロがそう言うのとアポロのブレスレットからまた三つの光が出る。

しかし、今度は緑色の光が強くなった。

そして、光が晴れた時には、

一夏「形状が………違う………？」

緑色を基準とした先ほどと違う形状をした全身装甲のISがいた。

観客席にいる一組の皆も驚いている。

アポロ「うん。詳しくは後で千姉にでも聞いてね？」

一夏「そうか、わかった」

でも、ISを持ってたなら俺にも教えてくれてよかったじゃないか？家族なのに。

そして、試合開始を告げる鐘が鳴る。

第三者SIDE

一夏「それじゃ、いつでも来いよ！アポロ！」

アポロ「うん、それじゃあ……………ッ！」

その瞬間にアクエリオンの右手に光の輪が三つ集まる。

アポロはそれを左手で一夏に向けて

アポロ「ふっ！」

払って三つ連続で投げる！

一夏「うあっ!？」

それはかなりの速度で一夏の白式の左肩、右足、横腹にヒットする。

アポロはこの試合二つしか使えない必殺技のうち一つをさっそく使用した。

『光波手裏剣』

名の通り光の手裏剣である。だが、その威力速度を舐めてはいけない。

一夏に三つの衝撃が襲いかかる。

一夏「(痛っ……!! ってまだ来るのか!?)」

アポロ「休む暇なんてないよ!一兄!」

アポロは休む暇は与えないつもりだ。すぐさま背中のウイングで空へ飛び、アクエリオンの両腕に付けられているビーム砲を一夏に向け、ビームを放つ。

ビームはマシンガンのように一夏に向かって連続で放たれる。

一夏は何とか回避するが無駄に動きが大きくとてもまずい。

一夏「(くそっ、俺が白式の反応に追いついていない!)」

一夏はまだISに乗ったことはあっても操縦をしたことは無い。それに白式のスペックは普通よりも大きいのでまだISに慣れていない一夏では白式に振り回されてしまうのだ。

アポロ「どうしたの一兄！？避けてばっかで攻撃しないと意味がないよ！」

一夏「（そうだ！攻撃しないと！）装備！装備は！？」

一夏が白式に問うとすぐさま現在展開可能な装備の一覧が現れる。

が、それが一覧なのかどうかは別だった。

一夏「一個しかない……………」

『近接ブレード』

それしか表示されなかった。

一夏「って！素手でやるよりはいいか！」

一夏はすぐに近接ブレードを呼び出し、展開する。

そして一夏の右腕二流紙が溢れ、手の中で形となって収まった。

それは1.6メートルはある長大な「刀」だった。

アポロ「近接武装ね……………面白そうだね！」

そう言ってアポロは銃撃を止めてビーム砲の元の位置に直し、一夏

へ接近する。

一夏「なっ！？そのIS近接戦闘もできるのか！？」

アポロ「格闘と言う名の……ねっ！」

一夏「くっ！うおおおおっ！」

ガキイン！

一夏の剣とアポロの拳がぶつかり合う！

そこではゼロ距離での格闘戦闘が行われた。

一夏は剣道の稽古を受けたおかげか太刀筋がさらに良い物になっている。

しかし、アポロはその剣の刀身部分以外を殴る。

いくら格闘戦でも刃に当たればダメージだ。ならばそれ以外を殴って軌道をそらせたり勢いを止める。そして、

アポロ「はっ！」

一夏「がっ！？」

隙があればカウンターを決め込む。

それがアポロの作戦なのだ。

今のでカウンターは六回食らったシールドも半分を切っている。

一夏「（このままじゃ不利だ！一回引いて体制を立て直さないと！）」

そう思い一夏はすぐさまアポロから離れる。が、すぐに対抗策を撃たれてしまった。

アポロ「逃がさないよ！」

アクエリオンの左腕のビーム砲が真ん中から二つに割れてそれぞれ水平に開き、巨大な弓『ルナティックアーチェリー』になる。

そしてすぐさま矢が現れルナティックアーチェリーの光の弦で矢を引き……

アポロ「ミサイルアロー！」

必殺技として放つ！

その矢は一夏を追尾する！

一夏「くっ！」

一夏は何とか避けようとする。しかし、

ドガアアアン！

その矢は一夏に当たり爆破した。

千冬SIDE

箒「一夏っ……………！」

二種類必殺技を本当に使用したか……………。

光波手裏剣は良い物の今の一夏にミサイルアローを使うとは、アポロも最近ゲーム以外でも容赦がなくなってきたな。

追尾性のありミサイルのような爆破能力のある弓矢。それがミサイルアロー。消費ポイントは少ない。撃ち落とされればそれまでだからな。それに寿命も少ない。しかし、今の一夏には対抗手段は無い。

だが……………

千冬「ふん……………機体に救われたな、馬鹿者め」

現在の一夏だったらどうなるだろうな？アポロのミサイルアローを
攻略するかもしれん。

一夏SIDE

——フォーマットとフィッティングが終了しました。確認ボ
タンを押してください。

一夏「（な、なんだ………？）」

意識にデータが直接送られてくる。それと同時に目の前にウインド
ウが現れ真ん中に「確認」と書かれたボタンがある。

訳も分からずに俺はそのボタンを押した。その瞬間に膨大なデータ
が流れ込んできた。

いや、違う。整理されているんだ。それが感覚的に分かる！

第三者SIDE

アリーナではアクエリオンを纏っているアポロとミサイルアローによる黒煙がある。

やがて、その黒煙が晴れた。

そこには、

アポロ「……………姿が……………違う……………ファースト・シフト一次移行だね……………」

そう、そこには先ほどと少し違う形状、より洗礼された形へと変化した白式を纏っている一夏がいた。

一夏「よくわからないけど、これでやっこの機体は俺専用にならしないな」

改めて白式を見ると最初の工業的な凹凸は消えており滑らかな曲線

とシャープなラインが特徴的などこか中世の鎧を思わせるデザインだった。

そして、その武器、今一夏が右手に持っている刀はかなり変化した。近接特化ブレード、その名は、

一夏「『雪片式型』？雪片って……………確か千冬姉が使ってた武器だよな……………」

そう、世界一になった織斑千冬が使った武器はただ一つ、『雪片』だ。

一夏「(……………俺は世界で最高の姉さんを持ったよ……………でも)」

ガキーン！バシユン！

雪片の刀身が開き開いた部分から青白い光の刃が現れる。

一夏「そろそろ、千冬姉に守られるだけの関係は終わりにしなくちやな。これからは、俺も、俺の家族を守る」

アポロ「……………」

それをアポロは黙って聞く。

一夏「行くぜ、アポロ」

その一夏の目をアポロは真剣に見る。

アポロ「……………うん。来い！一兄！」

アポロは再び両腕のビーム砲で一夏に銃撃を放つ。

だが！

一夏「（見える！銃弾が見える！）」

一夏は先ほどと違いハイスピードで、手際よくビームを避ける。

アポロ「それなら！」

アポロはルナティックアーチェリーを展開し、

アポロ「ミサイルアロー×4！」

四本のミサイルアローを同時に放った。

一夏「（これも！）見えるっ！」

一夏はすぐさま回避行動をとる。それを追いかけるミサイルアローを一夏は

斬！

一夏「一つ！」

当たる寸前で斬る！切られた矢は爆破する！そしてさらに二つ目も破壊する！

一夏「二つ！」

そして残りの二つを

一夏「はあああああっ！」

横一闪！

纏めて斬り、破壊する！

アポロ「(さっきとまるで桁違い！？しかもこの距離じゃ……！)」

そう、先ほどの回避とミサイル撃墜の行動でアポロは一夏に接近されていたのだ。

一夏「(行ける！) らあああああああ！」

アポロ「(それなら) おおおおおおおお！」

剣を構えて、拳を構えて、

一夏は、アポロは、

突撃する！

が、その剣と拳は交わることは無かった。

突然試合終了を告げるブザーが鳴り響く。

『試合終了。勝者————織斑アポロ』

一夏「あれ……？」

アポロ「へ……？」

一夏もアポロも意味が分からないって顔をしている。

観客席からも何故？と声上がる。

とりあえず結果から。

一夏は負け、アポロが勝利した。

第七話 白雪（しらゆき）と翠月（すいげつ）（後書き）

はい、今回も必殺技の解説です。

…光波手裏剣

光の手裏剣をつくり敵に投げつける。

ただ、原作でもあんまり活用されていない技。

A C Eでも使用可能だが命中精度がかなり低いので使い物にならない。

スパロボでは「天空拳・昇竜天雷」を使用時に相手を怯ませる技とでしか使用されていない。

今作ではかなりのスピードがある手裏剣として使用する。多分結構活用する。

…ミサイルアロー

今作でのオリジナル技で矢を着弾することで爆破するミサイルのようなものに変える技。見た目は矢だが中身はミサイル。追尾性能もあるが寿命が結構短い。

複数まとめて発射も可能。

と、こんな感じです。

では、次回予告！

《次回予告》

一夏「あー、負けた！」

箒「一夏、これから反省会だ。来い」

一夏「へ？ちょっと！待てって！いきなりすぎるだろ！」

アポロ「あははははは……一兄が連行されちゃったから」

アポロ「次回！『反省会は大切！』」

アポロ「僕も反省点とか結構あるしね。何事も反省が――――」

ぎゃああああああああ……

アポロ「……………後でマッサージでもしてあげようかな？」

第八話 反省会は大切！（前書き）

はい、アナザーです。

それでいきなりですが投稿が遅くなります。テストが近いので勉強しないと今の社会で厳しいです。

そして11月24日から12月5日。この間には投稿は完全にできません。

先に言うておくことにしました。感想などはケータイから受け付けますので。

では、本編go！

第八話 反省会は大切！

アポロside

千冬「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合が終わって一兄は馬鹿者から大馬鹿者へとジョブのグレートアップを果たした。

良かったね一兄。賢さが159下がったよ。

千冬「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。身を持ってわかっただろう。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。いいな」

一夏「……はい」

あんなに大見得切って負けちゃったらそうなるよね……………一兄。

山田「えっと、ISは今待機状態になっていきますけど、織斑くんが呼び出せばすぐに展開できます。ただし、規則があるのでちゃんと

読んでおいてくださいね。はい、これ」

どさっ。

どさっ？今一兄に本が渡された瞬間にどさって鳴ったけど？という
か電話帳並みに大きいね。

千冬「何にしても今日はおしまいだ。帰って休め」

敬う気持ち無しの命令。

なんか、一兄や僕が守る必要があるのかな？

箒「帰るぞ」

箒姉もたまに怖い。

アポロ「あ、僕少し休憩してから帰るから。一兄や箒姉、レイも先に帰ってていいよ」

一夏「そ、そうか？それじゃあな？」

箒「わかった」

レイ「えっと、それでは、また後で」

と、皆先に帰ってもらった。

そして、僕は一人、皆がいないのを確認して

アリーナへ向かった。

ちゃんとまだ貸切時間である。けど、試合が終わればみんな帰るからね。

そして、僕はアクエリオンを起動させる。

その色は赤。赤を基準とした機体だ。

アクエリオンには三つの体系がある。

それはそれぞれ赤、青、緑でアクエリオンソル、アクエリオンマーズ、アクエリオンルナと言う体系に分かれている。だがシールドエネルギーは三つとも共有している。ポイントは共有していないけどね。

でも、ソルには……………

アポロ「……………だめだ」

アクエリオンマーズ、アクエリオンルナ。この二つは問題ない。でも、どうしても、もう一つの形態、アクエリオンソルに問題がある。

それは……………

千冬「やはりここにいたか」

アポロ「え？ 織斑先生？」

おかしい。確かに誰もいないのを確認したはず。

千冬「お前の考えていることなんてお見通しだ。誰の姉だと思っている」

た、確かに。千姉の場合なぜか納得できるのだ。凄く不思議。なんでもできそうである。

千冬「で、やはり表示されないのか？」

表示されない物。それは必殺技のポイント残量。

マーズ、ルナでは表示されるそのポイント残量。だが、ソルでは表示されない。

そして、ソルでは……………必殺技が使えないのだ。

ポイントだけでなく技を出そうとしても出ないのだ。

一兄なら諦めないはず、だから頑張ってきたがどうしても出ない。

アポロ「うん……………」

千冬「そうか………努力することはいいことだ、だがあまり無理をするな。それに時間もある。ゆっくり探せ」

アポロ「うん……ありがとう」

でも、どうしても考えてしまうんだ。何故ソルが力を発揮しないのか。

アポロ「ただいまー」

レイ「あ、お帰りなさい。遅かったですね？」

アポロ「うん、ちょっとね」

僕はそう言って少しベッドに寝転ぶ。

というか今日はかなり濃い一日だったね。いきなり試合だもん。

ガチャっ

一夏「お、アポロ。帰ってきたか」

アポロ「一兄？」

レイ「一夏さん？何かしましたか？」

一夏「ああ、アポロ。俺にISの訓練を付けてくれ！」

アポロ「訓練？」

一夏「ああ、専用機も持てたし、千冬姉だって動かせるときは動か
せて言ってたしな。箒ともやろうって言ったけどさ、正直どうす
ればいいかわからねえ。レイも確か専用機持ってたよな？頼む！」

アポロ「うーん………僕はいいけどレイはどうする？」

レイ「私もお願いします。練習しないと強くなれませんし」

多数決で決定だね。

アポロ「うん。それじゃあ一緒に頑張ろう、一兄」

一夏「おお！ありがとな、アポロ、レイ！」

レイ「はい！頑張りましょう！」

一夏「そうだな！じゃあな、アポロ。ありがとな！」

そう言って一兄は部屋から出た。明日からは訓練だね

アポロ「それじゃあ、僕はシャワー浴びるね？」

レイ「はい、私はもう浴びたので」

とりあえずソルの事を考えつつ訓練しないと。

アポロ「よし、今日の戦闘のまとめをしないと」

レイ「戦闘のまとめ………ですか？」

アポロ「うん。勝ったとしても完璧な戦闘なんてないからね。絶対にどこかに欠点があるんだよ。今回はオルコットさんとの戦闘にて銃弾への反応と一兄の戦闘で接近を許したこと、他にもいろいろあるよ」

レイ「え？銃弾は完璧じゃありませんでしたか？」

アポロ「ううん。ライフルの弾丸は正直反射蹴を仕えなかったら危なかった。もし僕が使ってたISがマーズじゃなかったら危なかったかもしれない。機体が三つあるからそれぞれに対応した反応がでないといけないし」

レイ「こ、細かいですね」

アポロ「それ以外にもいろいろあるからね。常に自分の戦闘には気を付けておかないと」

予習復習は大事だ。

それに、ソルについての研究も……………

セシリア side

サアアアアアア………

「セシリア（……………何故、こんな気持ちになるのかしら……………？）」

わたくし、セシリア・オルコットは部屋でシャワーを浴びながらそう思った。

圧倒的だった。

今日の試合、織斑アポロとの試合。

わたくしは完膚なきまでに叩きのめされてしまった。一撃も当てることができずに。

セシリア「(――――織斑、アポロ――――)」

名家に婿入りした父。母には多くの引け目を感じていたのだろう。幼少の頃からそんな父親を見ていたわたくしは『将来は情けない男とは結婚しない』とあの時からそう思った。

わたくしの両親は三年前に事故で他界してしまった。

そして、それからはあつという間に時間が過ぎて、わたくしの手元には莫大な遺産が残った。それを金の亡者達から守るためにあらゆる勉強をして、その一環で受けたIS適性テストでA+が出て代表候補生まで上り詰めた。

政府から国籍保持の為に様々な好条件が出された。両親の遺産を守るためにわたくしは即断した。第三世代装備ブルー・ティアーズの第一次使用試験者に選抜された。稼働データと戦闘経験値を得るために日本にやってきた。そして、出会ってしまった。

セシリア「織斑、アポロ……」

その名前を口にしてみる。不思議と、胸が熱くなるのが自分でもわかった。

どうしようもなくドキドキとして、わたくしはそっと自分の唇を撫でてみた。

「……………」

暑いのに甘く、切ないのに嬉しい。

—————なんだろう、この気持ちは。

意識をすると途端に胸をいっぱいにする、この感情の奔流は。

—————知りたい。ただ、織斑アポロという男を。

—————知りたい。あの強さを。

「アポロさん……………」

ただ、知りたい。

浴室には水の流れる音だけが響いていた。

第八話 反省会は大切！（後書き）

はい、フラグ立てました。アポロ君。このままガンガン立てていこう。

んで、皆様、前書きにも言ったとおり投稿が遅くなります。今まで家に帰ってきてすぐ書いていましたが勉強も入れば簡単にはできません。

誠に申し訳ないです。

では、次回予告！

《次回予告》

アポロ「クラス代表選が終わってからISの訓練がまたスタート！」

レイ「アクエリオンについても先生がすでに伝えてくれましたからね」

アポロ「うん。それに……………にしたから」

レイ「……………アポロさんって以外に酷いですね」

アポロ「勝者に従えってことだよ」

アポロ、レイ「次回、『ある日の訓練とパーティー』」

一夏「よかったな、アポロ！クラス代表おめでとう！（嫌味気味）」

アポロ「（それはどうかな？一兄？）」

第九話 ある日の訓練とパーティー（前書き）

はい、アナザーです。

そろそろテストが近いです。

多分今月はまだ投稿できないと思います。

では、本編GO！

第九話 ある日の訓練とパーティー

アポロSIDE

千冬「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑兄弟、オルコット、アーンヴァル。試しに飛んで見せろ」

四月の下旬、今日も僕たちは千姉の授業と言う名の訓練を真面目に受けている。

千冬「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

と、千姉にせかされる一兄。

もうすでに僕とオルコットさんとレイは展開し終えている。ちなみに形態はソル。アクエリオンについては千姉がクラスに説明してくれた。でも、そのおかげでソルを使える。何度も使えばポイントが見えるようになるかもしれない。だからできる限りはソルを使う。

ちなみに僕たちのＩＳの待機形状は僕は赤、青、緑色の宝石が付いているネックレス。オルコットさんは左耳のイヤークラス。レイは白い指輪で左手の人差し指に着けている。一兄は右腕のガントレット。何故か一兄だけ防具なのだ。まあ、ゲームだったら指輪とかネックレスもアクセサリー防具だけどさ？「FF」とか「とともの。」（↑「。」は誤字ではない）とか。

一兄は右腕を突き出しガントレットを左手でつかむ。一兄はこれが一番集中できるらしい。

そして一兄の右手首から全身が光に包まれ晴れた時にはすでに一兄は白式を纏っていた。

千冬「よし、飛べ」

と、千姉が言った瞬間に僕たちは飛び上がった……一兄以外飛びあがった。

一兄、ボーッと見てないで飛ばないと。

一夏「よしっ……………」

そして、一兄は、

一夏「うわっ！うわああああああつ！？」

変な風に飛んで行った。どうやってたらあんなふうになるんだろうか？
 というか危ないよ？

ちなみに速さではこの中ではレイのグランニューレが一番早い。そ

の次に僕のアクエリオンソルですぐ後ろにオルコットさんのブルー・ティアーズ、最後に大きく離された一兄の白式という順番だ。ソルでちなみにマーズは早いけど回避能力はそこまで長けてはいない。ルナの速さはそこそ早く空中回避能力はかなりある。ソルはその中間だ。

千冬「何をやっている。スペック上の出力では四機の中では白式が一番上だぞ」

なかなか僕らに追いつかない一兄にさっそく千姉からのお叱りが来ている。

というか白式ってグランニューレより早いんだ……………

一夏「そう言われても……………。自分の前方に角錐を展開させるイメージだっけ？ ううゝ、よくわかんねえ……………」

アポロ「イメージは所詮イメージだよ一兄。自分にとってやりやすい方法を探したほうがいいよ」

一夏「そう言われてもなあ。大体、空を飛ぶ感覚自体がまだあやふやなんだよ。何で浮いてるんだ、これ？」

白式には翼のような突起が背中に二つあるけど、どう考えても飛行機とかとは同じ理屈では飛んでないよね？

アポロ「オルコットさん、長くなってもいいから一兄に説明してあげて」

オルコット「反重力力翼と流動波干渉の話になりますが？」

アポロ「いいよ。やったれ」

一夏「わかった。説明はしてくれなくていい」

アポロ、オルコット「残念だよ（ですわ）」

最後、オルコットさんと一緒に言っで一兄を少しおちよくった。

何故かオルコットさんの顔が赤い。どうしたのだろうか？

レイ「（……………何故でしょうか？少しイライラします……………）」

レイはどうして少しムツとしているのかな？二人ともどうしたのだろうか？

千冬「織斑兄弟、オルコット、アーンヴァル、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

と、千姉から次の指令が発生。

オルコット「了解です。では、アポロさん、お先に」

え？今、「アポロさん」って……………

レイ「……………それじゃあ、私も失礼します」

アポロ「えっと……………レイ、何か怒ってる？」

レイ「別に怒ってません……………では」

や、やっぱり怒ってるよね？僕、何かしたかな？

と、地上に向かった二人は上手に完全停止もクリア。

さすが代表候補生だね。本当にうまい。

よし、僕も行こう！

アポロ「じゃ、先行くね、一兄」

と、地上へ向かう。

……よし、このタイミングだ。

完全停止は成功。目標は？

千冬「12？だ。反応が速すぎるぞ」

おきついお言葉を受けました。

そして、最後に一兄。

地面に接近する一兄。そして――――アレ？この距離
まであの速度って、完全な。

ズドオオオオンッ！！！！

激突コースだね。

というかクレーター出来ちゃってるし。

皆慌てているね。そりゃあ、あの速度であの音だもんね。

ま、ISつけてるから死なないとは思うけど。

とりあえず僕とレイ、箒姉と山田先生、千姉で一兄の落ちた所を見に行く。

千冬「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

一夏「……すみません」

さっきの激突で出来たクレーターの中では汚れ一つない白式を身に纏っている一兄の姿があった。

箒「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

箒姉？アレは教えてるんじゃないんだよ？

『ぐっ、とする感じだ』

『どんっ、という感覚だ』

『ずがーん、という具合だ』

解説理解、共に不能です。

それに小説じゃもっとわからないでしょ？

アナザー「メタいからやめて！」

ケチ。

千冬「織斑兄、武装を展開しろ。それくらいは自在にできるようになっただろう」

一夏「は、はあ」

千冬「返事は『はい』だ」

一夏「は、はいっ」

千冬「よし、でははじめろ」

一兄は言われてから横を向く。そして一兄は再度突き出した右腕を左手で握る。そして右の手のひらから光が放出され形となる。

一兄の手には『雪片式型』が握られていた。

千冬「遅い。0.5秒で出せるようになれ」

しかし千姉の評価はまだまだ低い模様です。

千冬「アーンヴァル、オルコット、武装を展開しろ」

レイ、オルコット「はい」

と、レイは手を前に出してハンドガン『アルヴォPDW11+GR』を、オルコットさんは手を真横に突き出して狙撃銃『スターライトMK?』を展開する。一兄より圧倒的に展開スピードが速い。ちなみに僕のソルは武装は無い。つまり武器は拳のみなのだ。

と言ってもルナは元々展開されてるし。変形すればビーム砲とルナティックアーチェリーに分かれるだけ。

マーズは星空剣のみ。大して展開とかを必要としないのはうれしいけど少しさみしいな。

千冬「さすが代表候補生だ。と言いたいところだがオルコット。貴様は誰に銃口を向けている？もしアポロに発砲したらこの世に存在していることを後悔させてやる（ゴゴゴゴゴゴゴゴ………!）」

オルコット「え!?!い、いや!違います!誤解です!それに、アポロさんに銃口なんて……………（ボソボソ）」

アポロ「織斑先生、落ち着いてください！オルコットさんも悪気があってやったわけじゃないんですから！というか私情でキレてませんか！？」

千冬「怒ってなどいない。オルコット、今すぐそのポーズをやめろ。正面に展開できるようにしろ」

オルコット「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な—————」

千冬「直せ（怒気）」

オルコット「イエス、ママ！」

恐い。最近の千姉は本当に怖い。

鬼教官なんてレベルじゃない。鬼神だよ、鬼神。

千姉の目がたまに赤く光るんだもん。背後にペルソナいるもん。ちなみに千姉の背後のペルソナは鬼じゃないけどイザナギ。というか僕アレ結構見た目気に入ってるんだよね。

千冬「アーンヴァル、オルコット。近接用の武装を展開しろ」

レイ「はい」

オルコット「えっ。あ、はっ、はいっ」

すぐさま反応するレイと遅めに反応したオルコットさん。

レイはすぐにもう片方の手に『M8ライトセイバー+GR』を展開する。

オルコットさんは手の中に光がくるくると空中をさまよっており展開できていない。

オルコット「くっ……」

千冬「まだか？」

オルコット「す、すぐです。———ああ、もうっ！『インターセプター』！」

武器の名前をヤケクソ気味に叫ぶオルコットさん。武器の名前を呼ぶことによってイメージがまとまり光は武器として構成された。

確かこれは初心者用の方法だったっけ？僕の試合にも使用してたよ
うな気がする。

千冬「……何秒かかっている。お前は、実戦でも相手に待ってもら
うのか？」

オルコット「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、
問題ありませんわ！」

千冬「ほう。織斑弟との対戦で簡単に懷を許していたように見えた
が？」

オルコット「あ、あれは、その……」

と、オルコットさんに睨まれた。え？え？僕？

オルコット『あなたのせいですわよ！』

プライベート・チャンネル
個人間秘匿通信でオルコットさんに怒られた。え？僕が悪いのかな？戦いなんだから仕方ないじゃん。

オルコット『あ、あなたがわたくしに飛び込んでくるから………』

マーズだと技以外だったら近接戦闘しかないんだって。

オルコット『せ、責任を取っていただきますわ！』

何の責任？

あ、ちなみに僕は何も返事はしていない。なのにもまるで分っているような反応を取っている。え？もしかして考えてることわかるの？最近の女性ってすごいね。

その頃、この作品の作者であるアナザーのもう一つの世界に、『バカとテストとアノ人達』の世界にて、

ピキーンッ！

リュウト「はっ！」

フェイト「ど、どうしたの？リュウト」

リュウト「今、俺と同じ考えを持った奴が別世界にいる感じがした」

フェイト「べ、別世界？」

リュウト「い、いや、気にすんな」

なのは「どうしたの、リュウト君？何か変だよ？」

リュウト「なのはの気のせいだ」

別世界まで通じていた。

女子1「というわけでっ！織斑一夏くん、クラス代表決定おめでとう！」

『おめでと〜！』

ぱん、ぱんぱーん。

とクラッカーが『クラス代表になった』一兄に乱射される。読者の皆様！今の『』の部分は重要だよ！

壁にも大きい『織斑一夏クラス代表就任パーティー』と書かれている紙が貼られている。

うんうん。めでたい事だ。

一夏「……………」

一名除いて。

一夏「アポロ先生！質問です！」

アポロ「はい、一夏くん」

一夏「どうして俺がクラス代表になっているんですか？」

アポロ「いい質問だよ、一夏くん。簡単に言うとな僕が一兄にクラス代表の座を献上したんだよ」

一夏「先生ー、そんなものいりません。それにセシリアさんに上げればいいと思いまーす」

アポロ「オルコットさんにも許可はもらったよ。だよな？オルコットさん？」

オルコット「はい。アポロさんの説明を聞いてクラス代表の座を織斑さんに譲りましたの」

アポロ「そして特別に一夏くんはこの言葉をプレゼントしてあげよう……………敗者は勝者にしたがい♪（超いい笑顔）」

一夏「本音は？」

アポロ「めんどくさいのは一兄にパス」

一夏「…………orz」

おっと、一兄をへこませてしまった。

アポロ「だけどね、一兄。これは一兄のためでもあるんだよ？」

一夏「ん？」

アポロ「僕がうまく操縦できるのも結局は練習のおかげ。練習しないと意味ないからね。最初から何でもできる人なんていないよ？学校でも一発で出来ている人がいるけどそれは先生の話を聞いて覚えただけなんだから何もなしで覚える人はいない。だから一兄がクラス代表になれば操縦する機会がもっと増える。あ、練習ばかりもダメだからね？ちゃんと休憩もとるように。体壊しちゃダメだからね」

一兄は千姉の名前に傷を付けたくないんだよね？なら頑張ってもらおう♪お手伝いもするし。

一夏「……………」

アポロ「ん？どうしたの？一兄」

一夏「いや、なんやかんや言っても結局アポロは俺のことを考えてやってくれたんだよな。ありがとう」

と、笑顔で返してくる一兄。

アポロ「一兄は家族でしょ。家族の手伝いをするのは同じ家族の仕事だよ。それに一兄は僕の兄だからね。兄をサポートするのも弟の仕事だよ。当たり前じゃないか」

一夏「それでもさ、ありがとな」

一兄？その笑顔は箒姉にやってあげてね。一兄はかっこいいんだか

ら。僕が女だったら惚れてるかもよ？ま、僕は男だから男に惚れる
そんなことは無いけど。

再び『バカとテストとアノ人達』の世界にて、

ピキーンッ！

秀吉「はっ！」

シャマル「今度は秀吉君ですか？どうかしましたか？」

秀吉「いや、なぜかワシの思いを否定された気が……………」

シャマル「大丈夫ですよ。リュウト君への思い、私たちは誰も否定
しません……………FFF団を除けばですが」

FFF団『ハーレムリア充を殺せええええええええええええええええ！』

リュウト「俺がいつハーレムになった！？第一俺を好きになつて
奴っていたっけ！？」

FFF団『鈍感リア充を血祭りに上げろ おお おお おお おお おお
！』

また別世界へ通じていた。

何故か今別世界に通じた気が……

一夏「というか、のほほんさんはどうしてアポロの背中に乗りかかっているんだ？」

のほほん「うゝん？気分かな？」

背中にはのほほんさんが首に両手を回して乗りかかっている。部屋でもよくあることだから慣れたけど。のほほんさんいわく『アポロンの背中は凄く落ち着けるからだよ♪』らしい。そんなに男の背中って落ち着けるのかな？千姉におぶってもらったことはあるけど。

ちなみに僕の座っている席で僕の左隣に一兄、一兄の左隣に箒姉、僕の右隣がレイ。のほほんさんは後ろ、というか背中でレイの右隣にオルコットさんだ。ちなみに僕とのほほんさんは僕の持参したポッキーを食べてる。ポッキーウマウマ。でもトツポも捨てがたい。

??? 「はいはい、新聞部です。話題の新入生、織斑一夏君と

織斑アポロ君に特別インタビューをしに来ましたー」

と、ポツキーを堪能していたら新聞部の人 came。まあ、珍しい男性IS操縦者のインタビューは新聞部としてはやらなきゃ損な所だよな。

??? 「あ、私は二年の黛薫子。よろしくね。新聞部副部長やってます。はいこれ名刺」

名刺渡されても結構困る気が……………

黛「ではまずはズバリ織斑一夏君！クラス代表になった感想を、どうぞ！」

一夏「えーと……………まあ、なんというか、頑張ります」

黛「え。もったいいコメントちょうだいよ。俺に触れるとヤケドするぜ、とか！」

一夏「自分、不器用ですから」

黛「うわ、前時代的！」

日本の誇る名優を侮辱する気ですか？同じ日本人でしょう？

黛「じゃあまあ、適当にねつ造しておくからいいとして」

いや、よくないでしょう。

黛「次！織斑アポロ君！どうして織斑一夏君にクラス代表の座を譲

ったの？」

アポロ「めんどくさかったからです」

黛「それってひどくない？じゃあ、何かコメントを！」

アポロ「へ？」

まだあるの？

アポロ「というかコメントって？」

黛「何でもいいから！ほらほら、早く早く！」

アポロ「え？え〜っと、これからもよろしくお願いします」

黛「面白くないな、じゃ、『女装大歓迎』って捏造しとくね！」

アポロ「どうしてそうなるんですか！？お願いします！やめてください！」

のほほん「え〜、似合いそうだけどな〜？」

アポロ「のほほんさん！そこはノらないで！」

黛「仕方ないな。そこまで言われたら止めるわ。さすがに可哀そうだしね。じゃあ次のセシリアちゃんとレイちゃんは……………もうアポロ君に惚れたってところで」

レイ「え……………！？／／／／」

オルコット「なっ……!?!?／／／／」

そんなことあるわけないじゃん。二人が僕なんかを好きになるなんて。

黛「ま、いいや。それで専用機持ちの四人は並んでね。写真撮るか」

四人「えっ？」

と僕たちから変な声が出る。何故かオルコットさんは喜色を含んではずんでいたような気がするけど。

黛「注目の専用機持ちだからねー。折角だからね」

オルコット「そ、そうですか……。そう、ですわね……。あの、撮った写真は当然いただけますわよね？」

黛「そりゃもちろん」

オルコット「でしたら今すぐ着替えて——」

黛「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

黛先輩はオルコットさんの手を引いてこちらに並ばせる。強引な人だなあ。

オルコット「……………」

アポロ「? どうかした?」

オルコット「べ、別に、なんでもありませんわ」

こつちをじろじろ見て来たので何かと思っただけと違っただけだ。

レイ「……………」

アポロ「レイもどうしたの?」

レイ「え? あ、なんでもありませんよ?」

レイは両手を振ってそう答える。二人ともどうしたんだろ?

黛「それじゃあ撮るよー。35×51÷4は?」

一夏「え? えっと……………2?」

アポロ「……………(脳内計算中)……………74・375かな?」

黛「アポロ君正解!」

というか普通は1+1はじゃないの? IS学園には常識は無意味ですってこと?

パシヤツと黛先輩のデジカメのシャッターが切られる。

オルコット「何故全員入ってますのー!?」

そう、いつの間にか一組全メンバーが撮影の瞬間に僕たちの周りに

集結していた。恐るべき行動力。そしてのほほんさんはまた僕の背中にぶら下がっている。そんなに気に入ったの？僕の背中に何かあるの？

オルコット「あ、あなたたちねえっ！」

女子1「まーまーまー」

女子2「セシリアだけ抜け駆けは無いでしょー」

女子3「クラスの思い出になっていいじゃん」

女子4「ねー」

オルコット「う、ぐ………」

と、皆に丸め込むようなことを言われるオルコットさん。

何はともあれ、これにて『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は十時過ぎまで続いて終わった。女子って体力凄くあるね。結構侮ってたよ。

第九話 ある日の訓練とパーティー（後書き）

なぜか自分のもう一つの作品の世界まで電波は通じた模様です。（笑）

そしてやはりクラス代表は一夏になりました。

では、他に報告や雑談が無いので次回予告！

《次回予告》

一夏「なんやかんやで結局クラス代表になっちゃったけど、まあ、なったからには頑張るか！」

アポロ「IS訓練む少しきつめにするよ。もちろんその分休みもあるけどね」

レイ「待ってください。その前に新しく専用機持ちが転校してくるそうですよ！」

アポロ、一夏「え？」

レイ「次回、『転校生はセカンド幼馴染』」

一夏「って、作者？タイトルが変わってないぞ？」

アナザー「じゃあなんて言えбайいんだ？貧N」

ドガアアアアアアアアん！

アポロ、一夏、レイ「な、何かが飛んできて作者を吹っ飛ばした……」

第十話 転校生はセカンド幼馴染（前書き）

どうも、アナザーです。

本当なら5日まで更新できないはずでしたが出来ました。

月曜日にまたテストがあって少し疲れたので今書いていたらできました。

息抜きパワー恐るべし。

では、本編GO！

第十話 転校生はセカンド幼馴染

| | | | |
| アクエリオオオオオオオオオン！

———| アクエリオオオオオオオオオオオオオオオオン
ツ！

――どうしてアイツ、アクエリオンの名を？

――じゃあ、
☐☐☐☐☐☐には誰が？

――太陽の……翼？

――……なんだ？ここは。

———
唱えよ、創聖合体。

——念心！

合体！

GO! アクエリオオオオオオオオンツ!

レイside

レイ「朝……………ですか……………」

朝起きた私は時計を見る。

……………少し早く起きちゃいましたね。

もう片方のベッドで眠っているアポロさんを見る。

アポロ「……………ん……………」

時々アポロさんは甘ったるい声を出したりする。寝ている時は髪留めを解いているみたいです。服も少しはだけている……………
本当に女の子みたいです。少し自信を失っちゃいそうです。

それにしても……………昨日から私はどうしたのでしょうか？いえ、正確にはオルコットさん達との試合から。

あの時のアポロさんの戦う姿を見ると、突然胸が熱くなりました。それに心がとてもあったかくなりました。あと……………不思議な感情が……………

この感情はなんでしょうか？

それに、アポロさんが女の人と話していたり仲良くしているのを見ると胸がムカムカします。

本当に私はどうしちゃったのでしょうか……………

アポロ「う……………ん……………うんッ……………ッん……………朝……………
……………」

レイ「あ、アポロさん？起きましたか？」

アポロ「うん……………おはよう、レイ……………」

レイ「おはようございます。また寝癖凄いですよ。梳いてあげますからちよっと座ってください。折角の綺麗な髪の毛なんですから」

アポロ「うん……………よろしく……………ありがとう……………」

アポロさんは自分のベッドにペタンと座る。私は櫛を持ってアポロさんのベッドに行ってアポロさんの後ろでアポロさんの長い黒髪を梳く。

フワフワしてとってもきれいな髪の毛です……………これで手入れしていないって聞いた日には私は少し神様を恨みました。こんなに可愛い顔でこんなにいい髪の毛……………これで男なんですよ？少し悲しくなりました。……………ぐすん。

アポロ「どうしたの……………」

レイ「え？あ、いいえ。なんでもないですよ？」

アポロ「そう……………？ならいいや……………」

でも、こうやってアポロさんの髪を触っていると、いいえ、アポロさんと一緒にいるととても幸せな気分になります。何故でしょう……………？

アポロSIDE

光莉「おはよう、アポロ君、レイさん」

アポロ「おはよう、光莉、美香」

レイ「おはようございます、光莉さん、美香さん」

朝、ようやく目が覚めて席に着くと光莉と美香に話しかけられた。

美香「ねえ二人とも、転校生の噂聞いた？」

アポロ「え？転校生？」

レイ「この時期に、ですか？」

光莉「なんでも中国の代表候補生だって」

代表候補生と言えばレイと、

セシリア「あら、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

腰に手を当てたポーズが似合うセシリアだ。

あ、セシリアは一兄の就任パーティーで僕達を馬鹿にしたことを謝られてから僕たちも謝ったら名前で呼んでいいって言われたから呼

んでいるんだよ？

というか、イギリス人って全員このポーズが似合うのかな？

レイ「でも、このクラスに転入するってわけじゃないんですよね？」

光莉「うん、二組なんだって」

一夏「ん？なんだ、アポロ。どんな話してるんだ？」

と話していたら一兄が会話に加わった。

箒「このクラスに転入してくるわけではないのだから騒ぐようなことではあるまい」

箒姉も会話に参加。

一夏「どんなやつなんだろうな」

代表候補生なんだから強いんだろうな。セシリアみたいな人なのかな？

箒「む……気になるのか？」

一夏「ん？ああ、少しは」

箒「ふん……今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」

ああ、また箒姉の機嫌が悪くなっちゃった……………

アポロ「とりあえず訓練しないとね。そろそろ実戦的なものも入れるからね？」

一夏「今まで武器の扱いや操作とかやってたからな。それをうまく生かさないとな」

今までは一兄の言う通り武器の扱い、IS操縦を教えていた。基礎をおろそかにすると意味ないからね。

あ、『クラス対抗戦』は読んでそのままクラス代表同士によるリーグマッチだよ。本格的なIS学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作る為にやるらしい。また、クラス単位での交流及びクラス団結を目標にしたイベントでもあるそうだけど。あ、やる気を出させるために一位のクラスには優勝賞品学食デザート半年フリーパスが配られるみたい。これはおいしい。

美香「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

楽しそうな女子一同に対して一兄は「おう」と返事をする。

???「——その情報、古いよ」

と、教室の入り口からふと聞き覚えのある声が聞こえた。

???「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

そこには腕を組み、片膝を立ててドアにもたれかかっているツイン

テールが特徴な女性がいた。

アポロ「鈴？鈴だよね？」

鈴「そうよ！中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音！今日は宣戦布告に来たってわけ！」

鈴はふっと小さく笑みを漏らす。

一夏「何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

鈴「んなっ……！？なんてこと言うのよ、アンタは！」

まあ、確かに気取った喋り方してたけどそれは無いよ一兄。鈴の気持ちにも気づいていないもんね、一兄は。

って、あ……………

アポロ「鈴」

鈴「何よ、アポロ」

アポロ「後ろ後ろ」

鈴「後ろ？後ろに何が————」

千冬「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

鈴「げ……千冬さん………」

千冬「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ邪魔だ」

鈴「す、すみません……………また後で来るからね、アポロ！逃げないでよ、一夏！」

何故か一兄だけ発現が厳しいのは乙女の事情だろう。

いわゆるツンデレなんだよね、鈴は。

箒「…………一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそだったな？」

セシリア「ア、アポロさん！？あの子とはどういう関係で—————」

バシンバシン！

千冬「席に着け、馬鹿ども」

千姉からの鉄槌しゅっせきばが二人の頭に被弾した。

そして今日がようやく始まる。

箒「お前のせいだ！」

セシリア「あなたのせいですわ！」

一夏、アポロ「ええー……………」

昼休み 迎えた瞬間 八つ当たり（字余り）

何？僕達が悪いのかな？

二人は午前中だけで山田先生からは注意を五回、千姉からは三回たたかれていた。二人ともどうしたんだろうね？あと、レイも注意二回と一回たたかれていた。

アポロ「レイ？どうしたの？ボーっとしてたけど」

レイ「い、いえ！なんでもないです！」

その反応はどう見ても何かある時の反応だけど……………まあ、本人がないって言うてるんだから無いんだろう。

一夏「まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こ

うぜ」

アポロ「うん、一兄の言うとおりでね。ご飯食べないと」

箒「む……ま、まあお前がそう言うのなら、いいだろう」

セシリア「そ、そうですね。行って差し上げないこともなくつてよ」

レイ「あ、はい。私も行きます」

僕達五人とそのほかのクラスメイトも数名ついてきて僕たちは食堂に移動した。

それで、食堂にて、

鈴「待ってたわよ、一夏、アポロ！」

どーん、と僕たちの前に立ちは下がった鈴。

ちなみに鈴とは僕が考えた名前の「鈴音」の略である。

鈴本人も気に入ってくれた。

とりあえず、

アポロ「鈴。そこにいると通行の邪魔になっちゃうよ?」

鈴「あ、ゴメン。ありがと、アポロ」

ちなみ鈴はラーメンを頼んだみたいだ。

一夏「ラーメン伸びるぞ?」

鈴「わ、わかってるわよ!大体、アンタを待ってたんでしようが!なんで早く来ないのよ!」

一兄はいまだに何故鈴の僕と一兄に対する態度が違うのかわかっていないみたい。鈴、たまには素直にいいなよ。

一夏「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか。元気にしてたか?」

鈴「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病氣しなさいよ」

一夏「どういう希望だよ、そりゃ……」

うん、たまにでもそんなのしたくないしなりたくない。

アポロ「向こうのテーブルが空いてるよ。行こう」

とりあえず食べないと冷えちゃうしね。鈴は伸びるだけど。

一夏「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

アポロ「一兄、質問しすぎ。一つずつにしなよ」

鈴「そうよ。それにアンタ達こそ何IS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

まあ、知り合いがいきなりニュースに出たら驚くよね？

セシリア「お二人様？そろそろどういう関係か説明してほしいのですが？」

箒「そうだ、一夏！ま、まさか付き合っているのか！？」

鈴「べ、ベベベベ別にあたしは付き合ってるわけじゃ」

一夏「そうだぞ。ただの幼馴染だよ」

鈴「……………」

一夏「？　なんで睨んでるんだ？」

鈴「なんでもないわよっ！」

……………一兄の鈍感もここまで来ると凄いよね。

箒「幼馴染………?」

アポロ「そう言えば箒姉と鈴は入れ違いだったね」

一夏「そうだったな。鈴、こっちが箒。ほら、前に話しただろ? 小学生からの幼馴染で、俺の通っていた剣術道場の娘」

鈴「ふうん、そうなんだ」

鈴「初めまして。これからよろしくね」

箒「ああ。こちらこそ」

そう言って挨拶する二人の間で僕の目には火花が散っているように見える。

そう言えば鈴も一兄の事が好きだったよね。

そう言えばどうしてセシリアは鈴の事を気にするんだろう?

セシリア「ンンンッ! わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、凰鈴音さん?」

鈴「……誰?」

い、いかにも興味ないですって顔してるね鈴。

セシリア「なっ? わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしょ? まさかご存じないの?」

鈴「うん。あたし他の国とか興味ないし」

セシリア「な、な、なっ……………!？」

鈴もまたスッパリ言ったね。セシリア怒ってるよ。

レイ「……………（よかった。凰さんは一夏さんの事が好きみたいです
ね。……………ってあれ？どうして喜んでるんでしょうか？）」

レイはレイで何か考え込んでるし。

……………あ、わかった。セシリアとレイも一兄の事が好きになっ
たんだ。

一兄は中学でもかなりモテてたからね。モテモテだね、一兄。

でも、ちょっとうらやましいかな？

鈴「一夏、アンタ、クラス代表なんだって？」

一夏「お、おう。成り行きでな」

鈴「ふーん……………」

と、鈴はどんぶりを持ってごくごくとスープを飲む。蓮華は『女々
しいから嫌』って言ってたね。

鈴「あ、あのさあ。ISの操縦、見てあげてもいいけど？」

顔を一兄からそらして目だけで向ける。

一夏「あー、うれしいけどさ、もうアポロに教えてもらってるから」

鈴「アポロが？アポロってIS乗ったことあるっけ？」

アポロ「うん、まあ——」

セシリア「アポロさんはこのわたくしに無傷で勝つほど強いのですよ？」

鈴「無傷！？アンタ、そんなにうまかったの！？」

アポロ「えーっと、なんといいですか……」

レイ「そう言えばアポロさんは操縦かなり慣れてましたね」

鈴「へえー………これならアポロと戦ってみたかったな」

アポロ「あ、あははははは………」

相変わらず自信家だよね。

鈴「そうだ、一夏。今日の放課後って時間ある？あるよね。久しぶりだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

一夏「あー、あそこ去年潰れたぞ」

鈴「そ、そう………なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもいいから。積もる話も——」

箒「あいにくだが、一夏は私とアポロ達とISの特訓をするのだ。
放課後は埋まっている」

あああああ、箒姉、なんか少し怒ってるよ。

鈴「じゃあそれが終わったら行くから。開けと言ってね。じゃあね、
一夏、アポロ！」

とゴクンとラーメンのスープを飲み干して鈴は片づけに行った。

頑張ってね一兄。

持てる男はつらいね。

第十話 転校生はセカンド幼馴染（後書き）

はい、こんな感じですね。

アポロくんは早速勘違い、セシリアとレイが一夏を好いていると考えています。

という訳で次回予告！

《次回予告》

アポロ「鈴も来てからさらに騒がしくなるね」

一夏「ああ、あいつが来てくれて助かった。話し相手はまだ少ないからな」

アポロ「あー、そう言う視点でとらえるわけなんだ」

一夏「ん？どうかしたか？」

アポロ「なんでもないよ、鈴も気の毒に」

一夏「ん？まあ、いいか。次回『鈴の思^{すず}い』」

アポロ「本当に鈍感だね。一兄……………」

第十一話 鈴（すず）の思い（前書き）

どうも、アナザーですね。

まあ、最近の状況報告ですが……………

テストが死滅しました。

え？何？この点数？マルがピンより多いよ？

と、よく見てみると……………俺が正解している部分はほとんど一点の所ばかり。

ミスしているのは二点など高得点な所ばかり。

俺は単純ってか？

ちょっと鬱な気分になりつつも本編GO！

今更だけどイメージOPとED

OP・キミシニタモウコトナカレ（シャングリ・ラ OP）

ED・明星ロケット（東方VOCAL）

第十一話 鈴（すず）の思い

アポロSIDE

昼ご飯からだだ今放課後、アリーナにて、

一夏「え？」

今日も僕とセシリアと一兄とレイでIS訓練をするはずだったけど、そこにはIS『打鉄』を纏っている箒姉がいた。

箒「な、なんだその顔は……おかしいか？」

一夏「いや、その、おかしいっていうか………」

アポロ「一兄は箒姉がいたことに驚いてるだけだから」

一夏「あ、そう言えば箒にISの訓練頼んでたっけな」

箒「そうだ。それに近接格闘の訓練もパターンが多い方がいいだろう。それで私の出番だ」

なるほど、確かに相手が必ず同じとは限らない。だからこそいろんなパターンニア地主できる対応力が必要だね。

アポロ「じゃあ、今日の一兄の相手は箒姉でいいかな？」

箒「ああ、任せてくれ、アポロ。では、始めるぞ。刀を抜け」

箒姉はやる気満々みたいだ。さすが、剣道の全国大会を優勝しただけではあるね。

アポロ「じゃあ僕たちは……………交代しながら戦おうか」

レイ「そうですね。それじゃあ、最初は私とセシリアさんで」

セシリア「わかりました、受けて立ちますわ」

こんな感じで今日の放課後訓練は始まった。

アポロ「じゃあ、今日はこれで終わりね」

一夏「お、おう………」

ぜえぜえと息が切れて地面に転がっている一兄。だが、他の皆はそうではないご様子。

僕と箒姉は一兄ほどじゃないけど疲れているけど代表候補生の二人はけろりとしている。

さすが代表候補生というべきか。

アポロ「それじゃあ、今日は解散だね」

セシリア「それでは皆さん。またの後程」

と、セシリアに続いて僕とレイも着替えに向かった。

あ、もちろん更衣室は男女別だからね？

アポロ「はあ……………結局今日もソルは駄目だったかあ……………何が悪いのかな？」

レイ「うーん……………ISの使用時間が一番考えられることですね」

アポロ「うーん……………やっぱりわからないや」

結局今日もダメだった。

本当に分からない……………でも諦めない。一兄だって諦めないさ。

アポロ「うーん……………一兄にでも参考に何か聞こうかな……………ちよっと一兄の所に行ってくる」

レイ「あ、はい。行ってらっしゃい」

と、ドアを開けた瞬間目に入った人がいた。

アポロ「鈴？」

鈴「あ……………ぽろ……………？」

アポロ「！」

鈴がいた。そして鈴の目には……………涙があった。

鈴「ッ」

アポロ「鈴！」

鈴は僕を見てから走り去る。

僕は鈴を追いかけた。

鈴SIDE

あたしは泣いていた。

一夏のバカがあたしの約束を間違っ
て覚えていたから。

あたしは真剣に言ったのに一夏は……………

しかもアポロに泣いてるのを見られたし……………最悪だ。

そう考えながらあたしは寮の外に出ても走っていたが、

ガシッ！

鈴「!？」

突然後ろから誰かに手を掴まれた。

後ろを振り向くと、

アポロ「はぁ……………はぁ……………やっと捕まえた……………！」

アポロがいた。

鈴「っ！放して！」

アポロ「いやだよ。なんで泣いてるのさ」

鈴「ほっとしてよ！アポロには関係ないじゃんか！」

アポロ「そんなことは無い!!!」

鈴「え……………!？」

その声は普段のアポロからは考えられないほど大きく、怒りがこも

っていた。

アポロの顔を見ればわかる。かなり怒っている。

アポロ「関係ないわけじゃないじゃんか！友達が泣いているのにほっとけるわけがないよ！なんで鈴はそういうのを相談したりしないのさ！？」

本当にアポロなんだろうか？アポロはこんなに怒るのだろうか？アポロは優しくかったバカにされたとしても物を壊されてもこんなに怒ることは無かった。いつまでもやさしいのだと思った。こんなアポロは初めて見た。

鈴「なんで……………そんなに……………」

あたしは気が付いたら言っていた。

その問いにアポロは答えた。

アポロ「鈴は、大切な友達だからだよ」

いつもの優しい、まるで太陽のような笑顔でアポロはあたしの問いに答えてくれた。

いつまでも、どこでも照らす太陽のように明るく暖かくなるような、全てを包み込むような笑顔で答えた。

あたしは月の光に映るその笑顔に見とれていた。

鈴「アポロ……………」

アポロ「……………とりあえず、部屋に来ない？体冷えるし」

鈴「うん……………」

アポロの言葉はとても暖かかった。

アポロSIDE

レイ「お帰りなさい。早かったですね……………って、凰さん？」

アポロ「うん。ちょっとわけありでね」

とりあえず鈴を連れて部屋に戻ってきた僕。

アポロ「鈴、座っていいよ。紅茶と麦茶と爽健美茶とウーロン茶のどれがいい？」

鈴「多いわね……………ウーロン茶で」

アポロ「うん。わかった」

そして、鈴から話を聞いたところ。

昔、鈴が一兄に約束していた『料理が上達したら、毎日鈴の酢豚を食べてくれる?』だ。日本だと「毎日味噌汁」の意味のだ。

それを一兄は何を勘違いしたのか、はたまた忘れていたのか『おごってくれる』と間違ったのだ。

意味を間違えるなら一兄だからありそうだけど、約束でなんていったかは覚えておこうよ一兄。

アポロ「うん。今回は一兄が悪い。内容は覚えておこうよ……………」

レイ「乙女の決心をないがしろにしている感じですね……………鈍感でもこれは酷いんじゃない?」

鈴「はあ……………やっぱりはっきり『好き』って言えばよかった……………」

アポロ「まあ、鈴も鈍感に遠まわしに言うのは少し失敗だと思うけどね」

鈴「やっぱり……………?」

一兄に遠まわしはダメなのはわかっていたはずだったのね。

まあ、それは箒姉にも言えたことだけど。

アポロ「うーん……………とりあえず、一兄は鈴に謝らないとダメかな？約束をちゃんと覚えていないから鈴が怒ったのは鈴の発言から一兄でもわかるはずだからね。間違えたならまず謝らないと」

鈴「うん……………あたしもちよつと言い過ぎたけど……………でも、絶対に一夏から謝ってくれないと許さない」

まあ、鈴から一兄の所に行って一兄が謝るのはおかしいかな？

レイ「一夏さん……………いつか後ろから女性に刺されそうで怖いです……………」

アポロ「何か僕もそう言われると一兄が刺される姿が目には浮かぶんだけど……………」

正直否定はできないと思う。特に箒姉あたりに刺されそうで怖い。

アポロ「とりあえず、今日はもう寝た方がいいよ、鈴」

レイ「そうですね。そろそろ就寝時間ですね」

鈴「えっと……………それなんだけどさ……………」

アポロ「どうしたの？」

鈴「えっとさ……………できれば……………今日泊めてくれない？」

……………WHAT？

アポロ「Why do you want to stay at my room？」

鈴「なんで英語？」

ちなみに訳は「なぜあなたは、私の部屋にとどまりたいのですか」だよ。

さすが代表候補生と言うべきか。別の国の言葉ぐらい知って当たり前みたいだ。

アポロ「で、なんで？」

レイ「アポロさん、察してあげてください。凰さんは泣いてたんですから……………」

あ……………そう言えば鈴の目は泣いた後で赤くなっている。

そっか……………同室に見られたら確実に何か聞かれるからね。それで「一兄が原因」なんて言えないよね。

アポロ「うん……………わかったよ。じゃあ、僕はソファで寝るから」

鈴「……………アポロ。出来れば一緒に寝ない？」

アポロ「お休み」

鈴「さすがに知らないふりは酷くない？」

アポロ「うん。小学生のころならわかるけど今は高校生だよ？」

この年齢で一緒に寝るのは……………わかるよね？

レイ「……………」

アポロ「レイ？」

レイ「え？あ、なんでもありません……………」

？ 最近レイもなんか様子が変だね？

鈴「いいじゃん。アポロってかなり気持ちいい抱き枕だし」

アポロ「多分この世界でかなり気持ちいい抱き枕って言われてもう
らしいなんて言う人はいないよ？」

むしろいたら教えてほしい。抱き枕なんて絶対嫌だ。

鈴「いいじゃんか。ベッドのサイズ的には大丈夫だし」

アポロ「そういう問題じゃないよ。うん。僕はソファで寝るから」

そう言ってソファで寝ようとしたら鈴に腕を掴まれた。

鈴「ダメ。ソファで寝てから落ちたら痛いし、首も変な風になっ
ちゃうわよ。いいから寝るの！」

アポロ「……………はあ……………わかったよ」

僕って本当に押しに弱いね……………自分でもわかってるのにどう

しても逆らえないんだよね……………ぐすん。

レイ「じゃあ、電気消しますね？」

アポロ「うん。いいよ。お休み、二人とも」

そう言ってレイは電気を消した。

ぎゅっ

鈴が僕を思いつ切り抱きしめる。

う……………いい匂いがする……………って！ダメダメ！何も考えない！
落ち着け！落ち着け僕！このままだとまずい……………早く寝ないと！

僕は終始葛藤していた。

結局睡眠不足でした……………

鈴SIDE

あったかい……………

小学生の頃、一夏とアポロの家に泊まりに行った時にアポロと同じ布団でアポロを抱きしめて寝ていたことがあった。

あったかかった……………ポカポカして気持ちよかった……………

これがお日様の匂いって言うのかな？

アポロ……………こんな小さい体でこんなにしっかりしている。

なんでアポロはこんなにしっかりしているんだろう？

レ イ S I D E

……… 苦しい。

何故かアポロさんと凰さんが一緒に寝る所を見るととても胸が苦しくなった。

私はどうしたんでしょう……… 苦しい………

ホントにどうしたんでしょう………

私は………

――翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。

その紙の表題は『クラス対抗戦日程表』

一兄の一回戦の相手は二組。

つまり……………鈴だ。

第十一話 鈴（すず）の思い（後書き）

話すことが無いので次回予告！

一夏「最近適當だな」

話すことないのに無理に話したら場がしらけるでしょうが。

アポロ「まあ、アナザーはアドリブ性がゼロだからね」

うん。ちゃんと予定とかカンペがないとめっちゃ司会とかで困るタイプ。

《次回予告》

アポロ「とうとう始まったクラス対抗戦。でも一兄は鈴をさらに怒らしちゃったみたい……………」

レイ「かなり怒ってましたね……………」

アポロ「正直鈴と一兄の中がよくなる前に一兄が死にそうで怖いんだけど……………」

レイ「次回！『雪は龍の逆鱗に触れる』」

アポロ「がんばってね、一兄。いろんな意味で……………」

第十二話 雪は龍の逆鱗に触れる（前書き）

はい、アナザーです。

今回の話はこの小説の物語で大切なところの一つです。

では、本編GO！

第十二話 雪は龍の逆鱗に触れる

アポロSIDE

一兄と鈴のケンカから数週間たった。

だけど、一兄はどうやら鈴に謝っていないらしい。

一兄曰く廊下や学食であっても露骨に顔をそむけられて全方位に向けて怒ってますオーラを出しているらしい。

一兄？自分から会いに行って謝らないとだめだよ？

箒「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質訓練は今日で最後だな」

というわけでアリーナ。

メンツはもちろんいつものメンバー。一兄、箒姉、セシリア、レイ、僕だ。

アポロ「うん。じゃあ、ラストの訓練はレイとの戦闘だよ。レイは近接遠距離両方兼ね備えてるからね。セシリアだと射撃がメインに、箒姉が相手だと近接がメインになっちゃうからね」

一夏「え？なんでアポロじゃないんだ？」

アポロ「僕だと体系ごとになっちゃうんだよ。ソルは近接格闘。マーズは剣による斬撃。ルナは弓やビーム砲の遠距離ってね。必殺技の避け方なんて覚えても意味は無いからね。他のISはそんなものないから。だからどの距離でも対応できるようにレイとの対戦だよ」

一夏「なるほど……………」

一兄に今回のメニューを説明してからアリーナのAピットのドアセンサーに触れる。

指紋や性脈人稱によって解放許可が下りると、ドアはバシユツと音を立てて開いた。

鈴「待っていたわよ、一夏！」

そこには鈴だった。腕組みをしてふふんと不敵な笑みを浮かべている。

箒「貴様、どうしてここにいる！関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

鈴「あたしは関係者よ。一夏とアポロの関係者。だから問題なしね」

箒「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな……」

セシリア「私もすこし気になりますわね……………アポロさんとのどんな関係者なのか（ボソツ）」

レイ「む……………（アポロさんの関係者って言葉を聞くと何故かムカムカしてしまいます……………）」

三人が怒ってる……………自分の好きな人いちにいの関係者って言われたからなのかな？

セシリアにレイも本当に一兄の事が好きなんだね。

……………なんか本当に一兄が背中を刺される気がしてきて最近少し恐怖が湧いてきている今日この頃。

鈴「今はあたしの出番。あたしが主役なの。脇役はすっこんでよ」

箒「わ、脇やつ……………!？」

鈴「はいはい、話が進まないから後でね。……………で、一夏。反省した？」

いや、鈴。一兄はまだあのことがわかっていないんだからいきなり『反省した?』とか聞いても、

一夏「へ?なにが?」

こうなるよ?

鈴「だ、か、らっ!あたしを怒らせて申し訳なかったかなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが!」

一夏「いや、そう言われても………鈴が避けてたんじゃねえか」
怒ってたんだから避けられるのは当たり前じゃんか。避けられても
謝りに行く精神は無いの？

鈴「あんたねえ………じゃあなに、女の子が放っておいてって言っ
たら放っておくわけ!？」

一夏「おう。なんか変か？」

そんなスッパリ………確かに、ほっておいてほしいって言われたら
放っておくのも正解だけどさ………

鈴「変かって………ああ、もうっ! 謝りなさいよ!」

一夏「だから、なんでだよ! 約束覚えていただろうが!」

鈴「あっきた。まだそんな寝言言ってるの!?! 約束の意味が違う
のよ、意味が!」

ああああああ、なんかまた喧嘩ムードになっちゃってるう………

鈴「あったまきた。どうあっても謝らないって言う訳ね!?!」

一夏「だから、説明してくれりゃ謝るっつの!」

鈴「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが!」

正しくは説明しちゃ意味がないからだ。

鈴「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで買った方が負けた方に何でも一つ言う事を聞かせられるってことでいいわね！？」

一夏「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

鈴「せ、説明は、その……………」

まあ、そりゃあね。告白的な事の意味を説明するんだもんね。

一夏「なんだ？やめるならやめてもいいぞ？」

一兄「…………親切心で言ってるんだろうけどそれは挑発に聞こえるよ？」

鈴「誰がやめるのよ！あんたこそ、あたしに謝る練習しておきなさいよ！」

一夏「なんでだよ、馬鹿」

ちよい？一兄？

鈴「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

これもうただの喧嘩じゃんか！何してんの！？

一夏「うるさい、貧乳」

一兄「！！馬鹿！！」

ドガァァンッ!!

いきなりの爆発音、そして衝撃で部屋がかすかに揺れた。

見ると鈴の右腕が指先から肩までがIS装甲化していた。

鈴さんは思いつきり壁を殴ったような——でも、拳は壁には届いていない——そんな衝撃だった。

鈴「い、言ったわね……言っではならないことを、言ったわね!」

まあ、人の身体的特徴を馬鹿にするのは酷いからね。誰でも怒るよ。

怒ってる。本気で怒ってる。マジで怒ってる。かなり怒ってる。

鈴が本当に怒ってる。

一夏「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

鈴「今の『は』!? 今の『も』悪いのよ! いつだってアンタが悪いのよ! ちよつとは手加減してあげようと思ったけどどうやら死にたいらしいわね………いいわよ、希望通りにしてあげる。———
——全力で、叩きのめしてあげる」

そう言って鈴はピットを出て行った。

あああああああ、一兄、大丈夫かな? なんかすごくボロボロになった白式が目に見えただけ。

というわけで夜。僕とレイの部屋。

鈴「いいわようせ……………あたしはペツタンコなのよ……………
絶壁なのよ……………ぬりかべなのよ……………」

アポロ「あー、うん。まあ、身体的特徴を馬鹿にされたら誰でも怒るよ」

レイ「そうですよね……………女の子の悩みですよ……………」

鈴「アーンヴァルはまだいいじゃん……………あたしなんて……………
……………」

何！？この葬式ムード！！

暗い！暗すぎる！

女子特有の悩みを言う鈴。そしてそれに便乗するレイ。

ぶっちゃけ僕が会話に入れるはずがない。

精々相づちを打つことしかできない。

というか気まずすぎるよ！

僕はしばらく二人の愚痴を聞き続けた。

フツ……………よく精神壊れなかったね。僕。（自虐的な笑み）

鈴「というわけで、また泊めて？」

アポロ「何かすごい端折ってる感じがするよね」

どんなわけなんだろうか。

鈴「いいじゃん。別にさ」

アポロ「いや、別によくないよ……………どうせ一緒に寝ようとかでしょ」

鈴「わかってるじゃない♪」

アポロ「余計ダメだから」

同年の男女が同じベッドで寝ちゃダメでしょ。見つかったら大変だよ。特に千姉。

レイ「凰さん。この前は許可しましたけど——」

おお！レイ！さすが真面目な優等生！彼女なら鈴を追い返してくれる！

レイ「けど！条件で凰さんだけでなく私もアポロさんと一緒に寝てもいいならここに泊まってもいいです！」

と思つてた時期が僕にもあったよ、こんちくしょう！

上げて落とすなんてひどくない！？

鈴「それなら仕方ないわね。安いもんよ。それでいいから泊めてくれない？」

レイ「交渉成立ですね」

アポロ「あれ？僕の許可は？本人の許可なしに本人の僕を交渉材料にしたりしないで！」

ちゃんと許可は取ろうよ！許可しないけど！

鈴「というわけで、交渉の結果よ」

アポロ「だから本人の許可！」

レイ「そんなに嫌がらなくてもいいじゃないですか……………」

アポロ「え？ちょっと？れ、レイ？」

レイ「そうですか……………アポロさんはそんなにも私の事が嫌いなんですね……………」

アポロ「え？え？え！？い、いやさ、嫌いじゃないけどさ……………」

レイ「嫌いじゃないなら……………私たちと一緒に寝てくれますか？」

アポロ「も、もちろん！」

あ

レイ「……………（グッ）」

鈴「……………（グッ）」

何二人して親指グツと立ててるのさ！

アポロ「はあ……………言っただけには仕方ないか……………じゃあ、レイと一緒に寝ればいいんだね？鈴はレイのベッドを」

レイ「アポロさん？私は『私たちと一緒に寝てくれますか？』って言ったんですよ？」

今日、自分の判断力をかなり恨んだ。

鈴「それじゃ、約束通り」

レイ「はい、寝ましょう！」

うん。僕の周りの女性陣は恐ろしい。千姉を筆頭に。

正直いくら少し大きいからといっても一つのベッドに三人で寝るのは狭いと思う。

アポロ「じゃあ、電気切るね」

そう言って僕は電気を切った。

よし！寝よう！と思ったが、

ぎゅ

何故？Why？

僕は右に鈴、左にレイと挟まれる位置で寝ている。

それで二人が僕を抱き枕のように抱きしめてくるのだ。二人のいい匂いと、その……………、む、胸が……………

イカンイカン。

煩惱失せよ！

寝よう！うん！

と言いつつ僕は結局全然寝れなかった。女の人に耐性を付けるべきかな……………？

レイSIDE

はあわあ……………アポロさん……………本当にあったかいです。

今私はアポロさんを抱き枕のように抱いています。

本当にあっただかいですう………

アポロさんは可愛いですし、本当に人形みたいですう

レイは朝になるまでの間はずっと嬉しそうにアポロに抱き着いていた。

第三者SIDE

試合当日、第二アリーナ第一試合。組み合わせは一夏と凰だ。

噂の新生生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていたのだ。会場入りできなかった生徒や関係者は、リアルタイムモニターで鑑賞するらしい。一夏と鈴はすでに空で試合開始の時を待っている。

そして、鈴のISの名は「甲龍^{シヘンロン}」。

ちなみにアポロ、セシリア、箒、レイは千冬、山田と管理室のモニターを見ている。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促され、二人は空中で向かい合う。距離は五メートル。

『それでは両者、試合を介してください』

ビーツー！！

試合開始を伝えるブザーが鳴ると同時に二人は動いた。

一夏は瞬時に『雪片式型』を展開した。

が、物理的な衝撃によって弾き返される。

鈴「ふん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど————」

青龍刀と呼ぶにはあまりにもかけ離れた形状の武器をボタンを扱うかのように回す。両端に刃の付いた、というか刃に持ち手がついてると言った方がいいか。それは、縦横斜めと鈴の手によって自在に角度を変えながら一夏に切り込んでいる。

しかも、高速回転しながらだから一夏は刃をぶつけてさばくのにも苦労している。

鈴「————甘いっ!!」

一夏が距離を取った瞬間に鈴のISの肩のアーマーがスライドして開く。中心の球体が光ったその瞬間。

一夏「ご……っ!?!」

一夏は殴り飛ばされた。だが、何とか意識を保ち体勢を立て直す。

鈴「今のはジャブだからね」

ジャブの後に来るのはストレート。

一夏「ぐあっ!」

一夏は地表に打ち付けられた。ダメージもかなりもらっている。

一夏「(く………これは………かなりまずいな………)」

箒「なんだあれは……?」

管理室で箒がつぶやく。

山田「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて、砲弾を打ち出す武器です」

その箒のつぶやきに山田先生が答える。

セシリア「わたくしのブルー・ティアーズと同じ第三世代の兵器ですわね……」

レイ「アポロさん。一夏さんは大丈夫でしょうか……」

アポロ「一兄がどうするかで決まるよ………練習しても本番で実力を出せなかったら意味がないからね。一兄の戦法で決まる」

アポロはレイの質問に平然と答える。アポロは自分の兄に対しても厳しいくする時は厳しくする。戦いで決して兄だから臍盾をしたりはしない。現実を突きつける。

アポロ「（一兄、どうする?）」

アポロSIDE

それから数分たった。

鈴『よくかわすじゃない。衝撃砲『龍砲』は砲身も砲弾も目に見えないのが特徴なのに』

一兄は鈴の攻撃を何とかかわしていた。そして、鈴の言う通り、あれには砲身も砲弾も見えない。

が、……一兄、何か行動をおこすみたいだね。少し雰囲気が違う。

一夏『鈴』

鈴『なによ?』

一夏『本気で行くからな』

一兄? 宣言しちゃダメでしょ。

鈴『なによ、そんなこと! 当たり前じゃない! とにかくつ、格の違

いつてのを見せてあげるわよ!』

鈴はすぐさま衝撃砲を次々と一兄に向けて放つ。

それを一兄は空中、地面をうまく移動して避ける。そして、攻撃せずに鈴をかく乱する。

鈴『な、くっ……………!!』

その瞬間、鈴は一瞬だけ一兄を探した。

勿論一兄はその瞬間を逃さない。

千姉から教えてもらった技。使用可能回数たった一回の奇襲攻撃。

イグニッション・ブースト
『瞬時加速』を利用した攻撃だ。

瞬時加速を使い零落白夜というバリア無効化攻撃で一撃を入れる。

千姉はこれをうまく使えば代表候補生とも渡り合えると言っていた。一兄はそれを、

一夏「うおおおおおっ!!」

使用する!!

だが、その一兄の刃は鈴に届かなかった。

いや、

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！！！！

届かせる前に妨害が入った。

そう、鈴に刃が届きそうになった瞬間だ。

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走った。

鈴の衝撃砲じゃない。それを上回る威力と範囲。

ステージ中央から黙々と煙が上がっている。どうやらさっきの『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波みたいだ。

山田「織斑君！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！ すぐに先生たちがISで制圧に行きます！」

山田先生が必死に二人に向かって言う。

一夏『—————いや、先生たちが来るまで俺達で食い止めます』

そして、煙が晴れる。

千冬「……………!？」

山田「え…………？」

箒「な……………!」

セシリア「な……………なんですよ……………『アレ』は……………?」

レイ「兵器……………それとも……………」

—————「生き物?」

煙が晴れた先にいたセシリアの言う『アレ』。

それを見た箒たちは驚きを隠せなかった。

『アレ』は二機。いや、二匹いた。

赤い装甲に巨大な両腕。

『アレ』のサイズはISと変わらない。

だが、形状が明らかにおかしい。

首元あたりには小さな腕が左右にある。

背中には巨大な砲台の様なものを背負っている。

更には虫のような翼まで生えていた。

この世界の者たちは『アレ』を知らない。

『アレ』の名は――

第十二話 雪は龍の逆鱗に触れる（後書き）

はい！現れたのはなんと！ゴーレムではなく『マクロスF』のバジユラです！

『何でバジユラ出したんだよ』と思われる方は結構いらっしやると思います。ですが！ちゃんと物語に関係があるんです。

では、次回予告！

《次回予告》

アポロ

「鈴。

一兄との約束とは別でさ、鈴と僕、約束したよね。

僕は絶対に鈴との約束を守るよ。

絶対に。

次回、『星を渡るモノ』

だから、任せて

約束を守るから」

第十三話 星を渡るモノ（前書き）

はい、どうも、アナザーです。

クリスマス？

そんなの友達とラウンドワンに行ったりして遊びますよ。

彼女？いるわけない。

寂しくなんてないもん！（泣）

では……………本編GO！

第十三話 星を渡るモノ

一夏SIDE

鈴「な、なによ……………こいつら……………」

鈴が驚くのも無理はない。

煙が晴れた先にいたのは、虫なのか、兵器なのか、生物なのか全くわからない。

赤い何かが二つ存在していた。

何なんだ、こいつらは……………

しかも俺達は一体ずつにロックされているのだ。

一夏「鈴、どうする？」

鈴「本当なら一体に集中したいけど、お互いにロックされてるから
タイマン
一対一で戦うしかないわね」

一夏「わかった。それで鈴。出来るだけ衝撃砲で援護してくれ」

鈴「何でよ？」

一夏「俺が『零落白夜』で一体落とせばその後は一対二で有利になる」

鈴「でも零落^{それ}白夜、かなりシールドエネルギー使うわよね？」

一夏「ああ。だから使用後は回避ぐらいしかできない」

そしてアレはそれぞれ空中にいる俺と鈴の方を向き背中にある突起の様なものを向ける。

鈴「！来るわよ！」

一夏「！」

次の瞬間にその突起の様なものから巨大なレーザーが放たれた。

俺と鈴は何とか回避に成功する。

おそらくアリーナの遮断シールドを破壊したのもこのレーザーだろう。

正直当たれば痛いレベルでは済まなさそうだ。

だけど、実際二人で勝てるかはかなり不安だ。

俺の『零落白夜』が当たっても倒せるかわからない。

倒せてもエネルギー切れになったら狙われるかもしれない。

どうする……………

アポロside

山田「もしもし！？織斑君聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

山田先生がものすごく取り乱してしまっている。だけど、今は違う！

アポロ「先生、落ち着いてください！教師が取り乱してどうするんですか！」

一度取り乱せば冷静な判断がつかなくなる。この状況でそれはまずい。

千冬「アポロの言う通りだ。それに本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

山田「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

千冬「先ほどアポロが言っただろう、落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

レイ「……いや、先生。それ塩ですよ？」

千冬「……………」

千姉はレイの指摘にピタリとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器に戻す。

千冬「なぜ塩があるんだ」

アポロ「さあ……………？」

レイ「大きく『塩』って書いてありますけど」

『……………』

全員が静まり返る。

山田「あっ！やっぱり弟さんのことが心配なんですネ！？だからそんなミスを……………」

『……………』

イヤな沈黙。話をそらそうとしてる山田先生。だけどそれは地雷ですよ？

山田「あ、あのですねっ—————」

千冬「山田先生、コーヒーをどうぞ」

山田「へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

千冬「どうぞ」

織斑先生にずっとコーヒー（微塩）を山田先生は涙目で受け取る。

はぁ……………

アポロ「千姉、それ僕に頂戴」

千冬「何？何を言っているんだ？アポロ」

アポロ「もらいますよ、山田先生」

山田「え？あ、アポロ君？」

僕は塩入のコーヒーを山田先生から勝手にもらい一気に飲む。

……………マズイ。

アポロ「……………マズイ」

千冬「アポロ。どういうつもりだ？」

どういうつもり、ね……………

アポロ「僕がやることはただ一つ」

—————約束を守る。

レ イ s i d e

アポロ「約束を守る」

ただ、アポロさんは一言言った。

千冬「約束、だと？」

アポロ「うん。約束を守るために僕は、一兄たちのいるアリーナに向かう」

ゆるぎない決意を瞳に宿してアポロさんは管理室から出ようとする。

山田「待ってください！アポロ君！これは訓練などではありません

！すぐに先生たちがISで制圧に向かいますから待って「待てるわけがない！」え？」

アポロさんは大声を上げる。

アポロ「『すぐ』！？遅すぎです！今あいつ等が来てもなんでまだ来ないんですか！？対応が遅すぎます！まさか突然来たから準備や反応できなかったなんて言いませんよね！？」

山田「え、えっと……………」

アポロ「もし、このまま教師が来ないで一兄がやられたらどうするんですか！？鈴が落とされたらどうするんですか！？二人が死んだらどうするんですか！？」

アポロさんは怒りをそのまま吐き出すように告げる。

アポロ「そんなに遅い教師に頼ることなんてできません！自分で行きます！」

管理室のドアが開きアポロさんは出ようとする。

山田「待ってください！アポロ君！危険です！織斑先生！アポロ君を止めてください！」

山田先生は織斑先生に問いかけるが。

織斑先生「アポロ……………無理はするな」

山田「なっ！？」

織斑先生はアポロさんを止めなかった。

山田「アポロ君！ダメです！」

山田先生はアポロさんを止めようとする。

そこでアポロさんは振り向いた。

そして、

アポロ「大丈夫です」

太陽のように明るい笑顔で山田先生に言う。

アポロ「『アクエリオン』の可能性は、無限大です。信じてください」

そう言ってアポロさんはアリーナに向かった。

レイ「……………先生。私も行きます。アポロさんとコンビネーション攻撃の練習なら大丈夫です」

セシリア「わたくしもですわ！アポロさんだけにやらせません！」

一人だけ戦いに行くのをわざわざ見過ごすなんてできません！

織斑先生「……………好きにしろ。私はやりたいならやれと言った」

レイ「わかりました！」

セシリア「行きますわよ！レイさん！」

私たちもアポロさんを追いかけて管理室を出た。

山田 side

山田「織斑先生！本当に行かせてよかったんですか！？」

織斑先生「……………正直私も本当なら行かせたくなかった」

山田「ならどうし」「だが、アポロの言ったことは全て事実だ」あ…
……………」

そうだ。確かに遅い。アポロさんの言っていることは全て本当だっ

た。

織斑先生「それにアレに一夏と凰が勝てる見込みはかなり少ない。だがあの三人はコンビネーションの練習をしている。だからこそ戦力投入だ」

確かに、織斑一夏君と凰さんは押されている。ですけど……………

織斑先生「だが……………」

山田「え？」

織斑先生「アポロなら、やってくれる」

……………この時、本当に織斑先生はアポロ君の事を信頼しているんだと分かった。

生徒として。家族として。

何より、弟として。

しかし、私たちは気が付かなかった。

篠ノ之さんが居なくなっていたことに。

アポロSIDE

ピットに到着した僕。

だけど、扉は固く閉ざされていた。

アポロ「…………おそろくかなり嚴重なロックだろうね」

そう考えていると二人ぐらい誰かが走る足音が聞こえた。

レイ「アポロさん！」

アポロ「レイ？それにセシリアまで……………」

レイとセシリアだった。

どうしてこんなところに？

レイ「アポロさん！私たちに戦わせてください！」

アポロ「え？」

セシリア「わたくしもお願いします！」

……………本人たちは真剣みたいだ。

だけど……………

アポロ「ダメだよ。これは訓練じゃない。撃墜、つまりエネルギー
シールド切れは死を意味する」

レイ「じゃあアポロさんは死ぬ覚悟はあるんですか!?!」

死ぬ覚悟。

レイSIDE

アポロ「あるよ」

そんな……軽々しく!?!

セシリア「なっ!?! そんなスッパリ言えるはずが————」

アポロ「言えるよ。僕はISって言う戦闘機械兵器に乗っている以上
何時事故で死んでもおかしくないからね。もちろん………
殺す覚悟も………」

レイ「あ………」

そうだ………ISは結局競技種目として使われても最終

的には兵器。

使い方を誤れば人を殺せる兵器なのだ。

野球のバットだって人を殴って殺すこともできる。

ボーリングのボールだって頭に当てれば殺せる。

道具は人を殺めることができる物ばかりだ。

私たちは……ずっとISを服か何かと勘違いしていたのかも
しれない……

そうだ……あの化物と戦ったら死ぬかもしれないんだ……
……

殺める決意……………死ぬ決意……………絶対に必要だ！

アポロSIDE

……………レイとセシリアの目が変わった……………

アレは……………

———決意を決めた目だ。

レイ、セシリア「覚悟なら……………あります!!」

……………うん。

アポロ「わかった……………準備して」

レイ、セシリア「はい!」

そう言うのとレイとセシリアはISを身に纏う。

そして僕も……………ルナを身に纏う。

レイ「でも、どうやってこの壁を……………?」

セシリア「かなりの強度ですわよ?」

アポロ「大丈夫だよ……………」

僕はアリーナへの道を防いでいる壁に右手を添えて左手を引く。

……約束……

僕は鈴と約束したんだ……

今でも忘れない……鈴が……こうして来てから数か月。僕
と一兄と鈴は仲良くなっていた。

その時に鈴と約束したんだ……

今でも忘れていない……

『ぜったいにやくそく、まもってくれるよね？』

『うん！ ゆびきりげんまん！』

守ってやるさ！絶対に！

約束を守るために！

そして、僕は左腕で壁の思いつきり、思いを込めて殴った。

思いを……………力に！

鈴 side

鈴「くっ！しつこい！」

本当になんなのよ、こいつら！

今、あたしと一夏はこの化け物相手に戦っている。

一夏には出来るだけ援護してくれって言われてるけど……………

鈴「とてもじゃないけど……………援護どころか倒すのも無理かも……………」

化け物は背中ofビーム砲だけでなく両腕にバルカン砲の様なもので設置されていた。

本当に厄介！

衝撃砲もほとんど避けられるし！

鈴「はあぁっ！！！」

あたしは攻撃方法を衝撃砲の攻撃をやめ、『双天牙月』を持ち化け物に接近する。

だが、もちろん化け物だってこっちに近づけさせてはくれないみたい。

バルカン砲の様なものであたしを牽制してくる。

でも、化け物の体系は人間じゃない。まさに虫のような体系だ。その腕からバルカン砲が放たれるのなら！

鈴「腕を狙う！」

すぐさま衝撃砲を腕に向けて放つ。

近づくと思わせての遠距離攻撃！このフェイントなら！

衝撃砲は確かに化け物の腕に直撃した。

チャンス！

鈴「やあああああああつ！！」

だけど、甘かった。

ガシッ！

鈴「！？そんな……………！！」

化け物の腕はISと大して変わらない大きさだった。

なのに、連結している『双天牙月』を片手で止めるなんて……………

…!

鈴「くっ！放して！放してよ！」

一夏「鈴！今行く！」

しかも化け物は『双天牙月』を掴んで離さない。

一夏がこちらに接近してくる。

馬鹿！相手は一人じゃないのに！

一夏「うおわっ！」

当然一夏はもう一体の化け物が空中からバルカン砲で一夏を止める。

一夏はそれを避けるためにまたあたしから遠ざかることになった。

一夏「くそっ！どけよ！」

だが、化物は一夏を狙い続けつつあたしから遠ざけるように一夏を攻撃する。

その瞬間、

鈴「うゝ……………」

あたしの視界が揺れた。

変な、背中から吸い込まれるような重力感に襲われた。

そして、腹と背中に大きな痛みが走った。

痛い。

痛い。

手が何かに触れる。固い何か。

化物と目の前には戦っている一夏とこちらに迫ってくる化物がいた。

一夏「！　　　　　！　　　　　！」

一夏が何を言っているか聞こえない。

わかるのはあたしに何かを呼び掛けている。

こちらに向かおうとしているがもう一体の化物に邪魔されている。

そしてもう一体の化物は私に迫ってくる。

恐くて体が動かない。声も出ない。

……………あぁ……………なんとなくわかった気がした。

あたしは殺されるのかな？

一夏……………結局約束……………思い出してくれなかったなあ……………
……………

……………なんでだろう？アポロ達に出会った思い出が見える……………
……………

……………これが走馬灯って言うのかな……………？

……………アレ？

.....どうして？

.....一夏との思い出よりも.....アポロとの思い出が..
.....明るくって.....楽しくって.....うれしかった
.....

.....会いたい.....

アポロ……………

アポロ……………！

約束を守ってよ！アポロオツ！！！！

[illegible]

その瞬間緑色の機体が化け物を殴り飛ばした。

その機体に誰が乗ってるかは全身装甲で普通ならわからない。

でも、わかる。

「鈴……………約束……………」

『困った時は僕の名前を叫んでほしい』

アレは……あの機体は………

「『その時は僕が飛んで駆けつけるから』……………確かに飛んできたよ、鈴!」

「遅いわよ……………アポロ!」

アポロ「……………」

アクエリオンルナ、アポロは自分が吹き飛ばしたバジユラを見る。

アポロの周りにレイとセシリアが下りてくる。

レイ「凰さん！大丈夫ですか！？」

鈴「え、あ、う、うん。大丈夫」

アポロ「鈴。シールドエネルギーの残量は？」

鈴「うん……………かなりやばいかも」

アポロ「そう……………セシリア、鈴を護衛して。レイは一兄を援護して」

鈴「待つてよ！アポロはどうするのよ！まさか一人で化け物を相手するとか言わないでよ！？」

自分が、代表候補生がまるで歯が立たなかった相手にISに乗ったばかりのアポロが勝てるはずがない。

普通はそんな化物に1対1を申し込まないだろう。

だが、アポロは普通じゃないんだ。

アポロ「負けないさ。セシリア！レイ！頼むよ！」

レイ、セシリア「了解です！」

レイは一夏の所に向かいアポロは鈴が戦っていたバジユラに向かい突撃する。

バジユラはアポロに対応して腕部にあるマシンガンでアポロを射撃するが、だが。

アポロ「アンタ相手には……………全力だ！！」

突撃しながら右腕を前に突き出す。

すると突き出した右手を中心にのバリアの様なものが形成されてバジユラの射撃からルナを守りつつ突撃する！

当然そんなバリアを張るには少量だがポイントを使用する。

だからこそその全力。速攻で仕留めるために。

バジユラは不利と感じたのかすぐさま空を飛ぶ。

勿論アポロは逃がすはずもなく追尾する。

だが、バジユラは考えなしに空へ飛んだわけではない。

鈴「なっ！？化物、体の中にミサイルが！？」

そう、バジユラはミサイルを十発あたり、アポロに向けて放ったのだ。

だが、ルナは飛行運動能力ならアクエリオンの中でトップクラスだ。

アポロ「（ミサイルは撃墜すれば問題ない！）」

バックで避けながらビーム砲で一つ一つ確実に破壊する。

そして、破壊し終えた瞬間に、

アポロ「！」

バジユラが突貫してきたのだ。

アポロ「ルナは遠距離型だけど格闘戦がダメってわけじゃない！」

アポロも対抗して格闘戦を仕掛けるためにバジユラに接近する。

鈴「アポロ！ダメ！あいつは力がバカ強いから力比べじゃ分が悪い！！」

だが、アポロは右ストレートをバジユラに叩きこもうとする。

そのバジユラに向かって放たれた拳はバジユラの腕によって止められる。

鈴はこの時まずいと思った。

だが、実際鈴はあの状況から攻撃するすべはあったのだ。

鈴は自分の攻撃が掴まれたという部分に集中しすぎたため他の武器の事を忘れていたのだ。

アポロ「わざわざどうも！」

右腕のビーム砲の銃口がバジュラに付きつけられる。

鈴「あ……………」

鈴はこの時気が付いた。

衝撃砲。

ルナのビーム砲のように自分には衝撃砲という攻撃方法があったことを忘れていたのだ。

掴まれているからこそできる戦法。

零距离射撃！

アポロ「あああああああああああ！！！」

ビーム砲から放たれる銃弾がいくつもバジュラにぶち当たり大きな穴が開く。

危険を感じたバジュラは離脱するために掴んだ拳を離す。

だが、アポロの猛攻はまだ続く！

アポロ「らあああああつ！！」

先ほど銃弾を当てた部分をピンポイントで全体重を乗せた踵落しを食らわせ地面に叩き付ける。

アポロ「光波手裏剣！」

すぐさま追撃で光波手裏剣を六枚放つ！

だがまだだ！

アポロ「逃がすかああああああああああああ！！！」

アポロは右腕を引き、すかさずバジユラに高速で接近する！

そして、引いた右腕の手の平に赤い球体が形成される。

そしてその球体を……………

ズドンッ！

『思念一閃光』

アポロの『鈴を守る』という約束、その思念を貫く意志と共に

爆弾ごとバジユラを貫いた。

一夏SIDE

一夏「アポロ……………来てくれたのか！」

鈴が危険な状態だったので助けに行こうとしたら化け物によって阻まれていた。

だが、アポロが化け物から鈴を救ってくれた。

レイ「一夏さん！」

一夏「レイ？レイか！？」

レイも来てたのか！？

レイ「背後から敵機接近中です！」

一夏「！？サンキュー！」

レイの指摘のおかげで何とか攻撃を回避できた。

一夏「レイ！来てくれたのか！」

レイ「はい！片方はアポロさんが相手しています。セシリアさんは凰さんの護衛です。シールがかなりやばかったらしいです」

一夏「そうか……………」

そんなにヤバかったのか……………気が付かなかった……………

一夏「とりあえず……………まずはこの化け物だな」

レイ「はい……………一夏さん。零落白夜は使えますか？」

一夏「……………あと一回だな」

レイ「一回、ですか……………」

……………そうだ！

一夏「レイ……………強力なエネルギー攻撃できる武器はあるか？」

レイ「エネルギー攻撃……………ありますけど」

一夏「それを俺に撃ってくれ」

レイ「はい！？一夏さんいったいどういう……………」

一夏「やってくれ」

レイ「……………はぁ、わかりました。何を考えているかわかりませんけどそれが一夏さんの作戦ですね？」

が、

??? 『一夏あっ!』

アリーナのスピーカーから大声が響いた。

その声の主は箒だった。

一夏「な、なにしてるんだ、お前………」

中形質を見ると審判とナレーターが伸びていた。

箒「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする!」

箒は肩ではあはあと息をしている。その表情も怒っているような焦っているような不思議な表情をしていた。

レイ「っ!?!? しまった!」

レイの言葉で俺は気が付いた。

化物が箒に向けて背中中のレーザー砲台を構えていることを。

発射される。間に合わない。

無情にも背中からレーザーが箒に向けて放たれた。

だが、

アポロ「うあああああああああつ！」

アポロがいた。

アポロがバリアーの様なものを張って箒を守っていたのだ。

しかし、レーザーはいまだに射出されている。
バリアーもよく見るとヒビが割れかけていた。

第三者SIDE

アポロ「ぐっ……あ………！」

箒「あ………ぽろ………？」

箒は驚愕していた。

アポロが、あの自分より小さく力を籠めればすぐに壊れてしまいそんな少年が自分を守ってくれているのだ。

対するアポロは焦っている。

アポロ「（マズイ………さっきの戦闘でポイントがかなりやばい………でも………ここであきらめたら僕と箒姉が危険だ！）」

技の多用によりアクエリオンのポイントはもはやいつ尽きてもおか

アポロ「……はあっ………はあっ………勝った………」

その言葉で全員が安堵する。

だが、バジユラは生きていた。

レイ「！」

レイのISに映った警告。

それは謎の機体に、バジユラにロックされたという警告だ。

すでにレーザー砲は構えられて発射体制に入っていた。

だが、

レイ「アポロさん!？」

すぐさまアポロはバジユラに向けて突撃する。

アポロ「させるかあああああああああああああああああああ
!!!!!!」

次の瞬間。

アポロがバジユラに激突した瞬間。

アリーナには爆発音が響き渡った。

第十三話 星を渡るモノ（後書き）

終わりが中途半端でしようか？

と言うか戦闘描写とかうまくかけたか不安です……………

でも！あと少しでシャルやラウラが出せる！

そう思うと気が楽になる気がするようないような！

とりあえず必殺技説明！

＊爆弾

思念を形に変えて爆弾にする。グレネードのようなもので威力、範囲は十分ある。ちなみに壁を破壊したのは壁を殴ってめり込ませて応用で拳に思念を込めて爆発の威力は低めにして壁を殴ったことで破壊した。爆破音より破壊音が大きい。最後のバジユラにもありつたけのポイントを詰めてバジユラを殴った。その爆発でレーザーごと爆破した。

＊思念一閃光^{しねんいつせんこう}

金色に光る矢を放つと光の一閃が敵を貫く。

イメージ的にわかりやすい例はスマブラXのゼルダかシークの最後の切り札である『光の弓矢』。

では、次回予告！

《次回予告》

鈴「あたしは気が付いた……………本当の気持ち……………自分の本当の気持ち……………あたし……………一夏の事言えないね……………次回、『その後の夕焼け』……………ねえ……………アポロ？……………あたしね……………」

第十四話 その後の夕焼け（前書き）

冬休みに突入して気分フィーバーなアナザーです。

クリスマス偏とか書けない自分の才能が憎いです。

と言うか気が付いたらもうすぐ2012年って……………なんか年喰った気分です。

では、本編GO！

第十四話 その後の夕焼け

アポロSIDE

いたい……………

からだがいたい……………

アポロ「う……………あ……………?」

僕は重い瞼を開く。

アポロ「ここ……………は……………」

どうやら僕はベッドに寝ているみたいだ。

起き上がったから周りを見渡す。

……………どうやら保健室みたいだ……………

そして……………

アポロ「……………レイ……………」

レイが僕が寝ているベッドにうつぶせて寝ていた。

レイ「……………ん……………あ……………アポロさん！」

レイは起きてから僕を見たら抱き着いてきた。

アポロ「レイ？」

レイ「……………心配したんですよ……………無茶して敵に突っ込んで……………」

あ……………そうか……………僕……………

アポロ「レイ……………ゴメンね？」

レイ「絶対に許しませんよ……………本当に心配したんですから……………！」

レイがさらに力を入れる。

千姉との約束……………破っちゃったな……………後で謝らないと。

アポロ「ところで……………僕が突撃した後どうなったの？」

レイ「はい……………アポロさんが突撃した後爆発で化け物は完全に破壊されました。つまり二体とも粉々です。アポロさんはISが解除されて体の状況ですけど右腕を痛めているようです。それと、試合は中止になったみたいです」

そう言えば右手がかなり痛い。

僕は両利きだから勉強とか食事とか大丈夫だけど。

それに試合は中止か……………

アポロ「あう……………?」

あれ?少し眠い……………かな……………?

レイ「アポロさん?大丈夫ですか?」

アポロ「あ……………うん……………疲れてるのかな?ちょっと眠いかな?」

レイ「そうですねか……………じゃあ、おやすみなさい。今はゆっくり休んでくださいね?」

レイはそう言って僕をベッドに寝かして布団を敷く。

あ、眠くなってきた……………

アポロ「うん、ありがと……………おやすみ、レイ……………」

レイ「はい……………アポロさん、おやすみなさい」

僕は最後レイの笑顔を見て瞼を閉じた。

おやすみ……………

あ……………今何時？

寝てからどれくらいたったかな？

『……………』

誰か……………いる？

??? 「……………アポロ……………」

誰だろう？

そう思って目を開けると夕方なのかオレンジ色の光と鈴の顔が写っていた。

アポロ「鈴……………」

鈴「……………」

あれ？反応しない……………

アポロ「鈴？」

鈴「……………ッ!？」

鈴は突然顔を真っ赤にして突然離れた。

鈴「あ、アポロ……………いつ起きたの？」

アポロ「あ、うん……………今さっきだよ」

鈴「そ、そう……………」

鈴は安心したように息を吐いた。

アポロ「そう言えば鈴」

鈴「え? な、何?」

アポロ「試合……………残念だったね」

鈴はどっちに転んでも得をする方だったのにね。

鈴「ううん……………約束は……………もういいの」

え……………? もういい?

アポロ「どうして? 鈴は————」

鈴「いいのよ……………あたしはね……………」

鈴はそう言っ僕に顔を僕の顔に近づけてくる。

そして……………

バーンッ！

保健室のドアが思いっ切り開いた。

セシリア「アポロさん、具合はいかがですか？ わたくしが看病に来て――――あら？」

突然保健室に入ってきたセシリアさん。つかつかと僕の所まで来て鈴を見てからその歩みを止めた。

セシリア「どうしてあなたが……？ アポロさんは一組の人間、二組の人にお見舞いされる筋合いはなくてよ」

鈴「何言ってるの？ あたしは幼馴染だからいいに決まってるでしょ。アンタこそただの他人じゃん」

セシリア「わ、わたくしはクラスメイトだからいいんです！ それにアポロさんはわたくしの『特別』コーチですわよ！」

何故特別を強調したのだろうか？

というか別にセシリアだけってわけじゃないんだけど………一兄やレイもだし。

鈴「そう言えばアポロ、化物に簡単に勝ったわね。あたしの特別コーチになってくれない？」

セシリア「そ、そんなのダメですわ！」

鈴「なんで？ いいじゃん。アポロもそれでいいでしょ？」

セシリア「だ、ダメですわよね！？ アポロさん！」

アポロ「いや、僕別にセシリアの特別コーチってわけじゃないじゃん。というかコーチじゃないから。でも、鈴も一緒に練習する？」

鈴「決定ね！ あたしもこれから練習に参加するわ！」

セシリア「そ、そんな………」

アポロ「………ぷっ………あはははははははははははは！」

セシリア「笑い事ではなくってよ！」

でも、本当に楽しい。

皆で笑えて。

皆で騒いで。

本当に楽しいんだ。

千冬SIDE

何だったんだ……あの化物は……

化物の解析をしようとはしたのだが残骸は粉々になっており解析は不可能だった。

何故、IS学園に襲来したのか。

何故、観客席の生徒を狙わずに一夏たちを狙ったのか。

何故、アポロ達が来た瞬間に2対同時にオルコットやアーンヴァルを狙わずにアポロを観察するように見ていたのか。

一体どういう事なんだ……………？

謎は深まる………

――私 は あなた を 待 ち 続 け ます。

——たとえ……………一万年と二千年でも……………

——いいんだ……………体が傷つくぐらい……………！

——心が傷つくより……………ずっとマシだから……………！

——これは危険な賭けです！

——もし万が一にも……………男子と女子が

合体しちまつたら………！

———創聖合体！GO！アクエリオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオン！！

ありえない……………

この世界はあり得ない

次元が

時が

時空が

セカイが

こんな世界は存在してはならないはずだ

だが、この世界は生まれた

誰のせいで？

何のせいで？

第三者SIDE

ここは、日本のとある孤児院。

その一つの部屋にてたくさんの子供たちと遊ぶ人たちがいた。

その部屋には子供たち以外には金髪のオールバックで赤い瞳をした青年とそれぞれ金髪と薄い紫色の髪をした少女、銀髪のメイド、紫色の髪でパジャマのような服装をしている女性、少し薄い赤色の長い髪をして中国風の服を着た女性、赤色の長い髪と赤い瞳をした女性がいた。

金髪「いだだだだだだだ！ちよっ！？髪引っ張るなって！禿げる！」

メイド「あらあら………大丈夫ですか？」

金髪「おい！絶対他人事って考えてるだろ！？」

少女（紫色）「あら？いいじゃない、懷かれてる証拠じゃないかしら？」

金髪「懷かれて禿げたくねえよ！」

と、金髪の青年が絶えている途中で

少女（金髪）「どーん！」

金髪「ごはっ！？」

思いつ切り金髪の少女にタックルされた。

身長差により腹に思いつ切りだ。

だが、足を踏ん張り青年は見事に耐えた。

金髪「ど、どうしたんだ？『フラン』」

今『フラン』と呼ばれた少女の名は

フランドール・スカーレット

フラン「『ナナシ』！だっこ！」

ナナシ「うん。ちょっと待って？な？俺死ぬかも」

金髪の青年の名前は『ナナシ』という。

ナナシの言葉にフランはぶうと頬を膨らませる。

その頬を突きたくなる人は結構いるのではないだろうか。

ナナシ「おい、レミリア。フランどうにかしてくれ」

レミリア「私も抱き着きたいのにー………！」

ナナシ「レミリア？それ以上攻撃を食らえば俺は確実に死ぬるからやめろ」

レミリア「うー………」

ナナシ「うー、じゃないからな？」

レミリアと呼ばれた少女の名は『レミリア・スカーレット』。

フランの姉である。

ナナシ「HELP。咲夜。マジHELP ME」

咲夜「フランお嬢様……………怒っている姿もかわいらしい……………
……………おっと、鼻から愛が……………」

ナナシ「ダメだこのメイド。早く何とかしないと」

咲夜と呼ばれたメイドの名前は『十六夜咲夜』。

ちなみに鼻から出た『愛』は鼻血の事である。

そしてさらにナナシに子供たちが集まりナナシで遊び始める。

人気なのだろうがナナシにとっては苦痛であるみたいだ。

何せ髪の毛を引っ張られたり蹴られたりするからだ。

ナナシ「パチュリー、こあ、頼む。助けて。このままだとマジでヤバイ」

パチュリー「人気だからいいじゃない（こあ、面白そうだから手を
出しちゃだめよ？）」

こあ「え、えっと……………頑張ってくださいね？」

ナナシ「味方が誰もいねえ!？」

それぞれパチュリー、こあと呼ばれた二人の名前は『パチュリー・

ノーレッジ』と『小悪魔』だ。

パチュリーは本を読んでおり、こゝは本の整理をしている。

ナナシ「いや！ラストの希望！美鈴！」

美鈴「……………」

ナナシ「美鈴？」

美鈴と呼ばれた女性は椅子に座ったまま、

美鈴「……………Z……………Z……………」

ナナシ「寝てやがった！？」

寝ていた。

彼女の名は『ホンメイリン紅美鈴』だ。

彼女らと彼は本来この物語にはいなかったはずの人物たちだ。

ナナシ「はあ……………やつと昼寝してくれたか……………」

ナナシは疲れたのかクッションに座り込む。

あの後子供たちは別の部屋で昼寝をしている。

咲夜「大丈夫？ ナナシ」

ナナシ「今心配しても助けられなかったことは忘れてないからな？
？というか……………」

咲夜「何かしら？」

ナナシ「相変わらず美鈴の起こし方が危険だな」

咲夜の美鈴の起こし方、それは脳天に包丁をぶち込むことである。

普通は死んでいるはずなのだがここはギャグ補正ということで。

ナナシ「まあ、アイツは昼になるといきなり寝だすからな……………
朝は起きてるのに」

そう、彼女はなぜか昼には必ずと言っていいほど昼寝をする。

それを咲夜が毎回毎回包丁で起こすという習慣である。

正直そんな習慣は嫌だ。

ナナシ「というかフラン。なんで首にぶら下がってんだ？」

フラン「えへへうなんなーく♪」

ナナシ「あっそ……………はぁ……………」

と、ナナシはため息をつき、窓から大きく広がる青空を見つめる。

この『IS』の物語は………
インフィニット・ストラトス
………確実に………

世界を交差して謎の方向へと進んでいく。

第十四話 その後の夕焼け（後書き）

なぜかISの世界に紅魔館組現る！

そして謎の男『ナナシ』。

正直紅魔館組の口調や性格があつてるか不安でございまする。

特にフラン。

『誰コイツ？』的なこと言われるの承知です。でも、本当に言われ
たら心折れそう……………

今作のフランは狂気にはなっていませんけどね？

と言うかあのフランマジ恐い……………弾幕が怖い……………

という訳で原作一卷終了です！

次回から原作二巻に突入！

という訳で！次回予告！

《次回予告》

のほほん「アポロン聞いた聞いた？」

アポロ「え？何が？」

のほほん「今度さゝここに転校生が二人来るんだって」

アポロ「転校生が二人？この時期に？何でだろう……………」

のほほん「次回『金と銀の転校生』」

アポロ「金と銀って？」

のほほん「わかる人には……………と言うか絶対わかるよね」

アナザー「最後の最後でメタ発言するのやめてくれませんかねえ！？」

第十五話 金と銀の転校生（前書き）

どうも、アナザーです。

もうすぐ2012年ですね。あっという間ですね。

小学背の時と今を比べると長さが全然違いますね。

アレ？俺、年取ったかな？

では、本編go！

第十五話 金と銀の転校生

――蛙の子は蛙。蛙になろうとする蛙はいない！

――蛙の子は蛙、鷹の子は鷹、狼の子は狼……

アポロSIDE

六月の頭で日曜日。

僕と一兄は五反田家にいた。

??? 「お前ら以外全員女子かし、いい思いしてんだろうなー？」

一夏 「してねえっつの」

アポロ 「そうだよ。弾は入っていないからそんな簡単に言えるんだよ」

と、僕と一兄に話しかけてきたのは『五反田弾』。

中学からの友達で……………僕にとってはある意味嫌な出会いだった。

一兄は入学当日に弾と同じクラスで知り合ってからやたら馬が合ったらしい。

鈴も同じ中学に入っており一兄は弾と、僕は鈴と同じクラスだった。

それで鈴と帰っている時に一兄を見つけて話していたら弾がいて、

弾「一夏！この二人の女子、お前の知り合いか！？」

……………思い出すのはやめよう。学ラン着ていたのに女子と思われて僕はあの時涙目だったらしい。（その際三人はかなり萌えたという）

今となってもいい思い出ではないけど弾とは仲良くなり中学では四人でよく遊んでいた。

それで現在。僕と一兄は弾の家に遊びに来ている。弾の部屋で『I
ト・ストライク・スカイ
S/V S』という第二回 I S 世界大会『モンド・グロツソ』の機体
が出ている I S での格闘ゲームをしている。千姉のデータは色々あ
って入って無いけど。

このゲームは二人対戦ができるので今は一兄と弾がやっている。

まあ、このゲームのせいで色んな国から苦情が殺到。

『我が国の代表はこんなに弱くない！』と。

というわけでソフト会社はその参加国である二十ヶ国それぞれが
最高性能強化された奥に別バージョンを発売したけどこれもまたト
ラブルになったりとか。

弱かったら自分の国は弱いつてゲームをしている子供たちに伝わっ
ちゃうからね。

ゲームのイメージの反映力はかなり強いからね。

弾「嘘をつくな嘘を。お前たちのメールを見てるだけでも楽園じゃねえか。全て遠き理想郷アヴァロンじゃん。招待券ねーの？」

と言って弾は隣の一兄に軽く肩でタックルする。

アポロ「ないよそんなの」

ちなみに僕は弾のベッドに寝転んでラノベを呼んでいる。『バ〇とテ〇トと〇喚獣』の6巻。この時の明〇はかなりかつこよかったと僕は思うよ。

一夏「だけど、鈴が転校して来てくれて助かったよ。話し相手少なかったからなあ」

確かにそうだね。現時点でもまだ全然知り合えていない人がたくさんいるからね。

弾「ああ、鈴か……………鈴ねえ……………」

と、弾はにやにやとにこにこの中間の笑顔を僕に浮かべる。

え？ここは一兄でしょ？

ドカンッ！

????「お兄！お昼出来たよ！」

と、ドアを蹴り開けて入ってきたのは弾の妹である『五反田蘭』。

歳は僕達よりも一個下で今は中学三年。確か……有名私立女子高に通っているんだよね。しかも優等生だって。まさに兄とは違う。たまに一兄が「アポロが妹だったら面白そうだな」って言った一兄をぶん殴った僕は間違っていないはずだ。うん。間違っていない。

蘭「さっさと食べにきなさい……って、アポロさんに………い、一夏さん!？」

アポロ「蘭。久しぶりだね」

一夏「あ、蘭。久しぶり。邪魔してる」

あ、蘭は一兄の事が好きなんだよね。本当にモテモテだね、一兄は。そのせいで殺されないかどうか弟である僕は不安で不安でしようがないです。

蘭「………い、いやー、あのー、き、来てたんですか？」

蘭は一度自分の格好を見てから壁に隠れて顔だけ出して一兄に問う。

ハッキリ言って蘭の格好はかなり………うん。

一夏「今日はちょっと外出。家の様子見るついでに寄ってみた」

蘭「そ、そうですかー」

先ほどと声が少し違うのは………蘭にもいろいろあるんだよ。

弾「蘭、お前なあノックくらいしろよ。恥知らずな女だと――――」

」

蘭「（ギロツ）」

と、蘭が弾に握り拳を見せて人睨み。

なんで言わないのよ!?

その目はそう語っていた。

恋する乙女は本当に怖いよね。

対する弾は引きつった笑顔でかなりの汗を垂らしている。うん、多分僕も弾の立場だったらこうなると思う。

弾「あ、いや、言って無かったか? そうか、それは悪かった。あ、あ、あ、あはははははは………」

うん。無理してる。めちゃくちゃ無理してる。

というわけで二階の弾の部屋から降りてきて一階。

弾の家は定食屋でとてもおいしい。ガボチャ煮は本当に甘いけど。

弾「うげ」

一夏、アポロ「ん？」

露骨に嫌そうな声を出した弾。後ろから僕と一兄はその弾の視線の先を覗く。

そこにはおそらく僕たちの昼食が用意してあるテーブルがある。でも、そこには先客がいたようだ。

蘭「何？何か問題でもあるの？あるならお兄一人外で食べてきてもいいよ？」

弾「聞いたか二人とも。今の優しさあふれる言葉。泣けてきちまうぜ」

アポロ「弾。現実見ようよ。逃げちゃだめだよ。逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ」

弾「俺はあのエヴァのパイロットじゃねえから。ホント……………この涙溢れるうれしさはどうすればいいかわからねえ……………」

アポロ「笑えばいいと思うよ」

一夏「その言葉は万能じゃないって生○会の一存の椎名真冬が言っ
てなかったっけ？」

アポロ「一兄、あと少しで弾の気持ち悪い無理笑顔が見られたのに」

弾「アポロ？お前、数行前まで俺を現実と向き合わせようとしてたよな？なのになんでお前までいじめに加わってんだ？」

アポロ「過去の事を思っちゃダメだよ」

一夏「修三乙」

弾「一夏！？お前そんなキャラだったっけ！？ギャグパートだから何でもしていいなんて思っただけだよな！」

アポロ「一兄、蘭、聞いた？何？ギャグパートって」

一夏「弾…………お前は、もう…………クソッ！なんで俺は友達が末期になる前に救えなかったんだ！」

蘭「一夏さん…………仕方ないですよ…………せめて、最後までらい…………」

弾「あれ？なにこれ？今日何！？皆して俺虐めて楽しい！？」

と、本日はこのふざけ合いが昼ご飯を食べた後にも続いた。

さすがに弾の目が虚ろになった時はまずいと思ったのですぐさま本気で励ました。

で、寮に帰ってきました。

山田「お引越しです」

アポロ、レイ「はい？」

五反田家でふざけ合ってからただ今夜。就寝時間までにはまだ余裕がある。

それでレイと話していたら突然の山田先生から来た突然のお引越宣言。

アポロ「あー、山田先生？どういうことですか？」

山田「部屋の調整がついたんです。アーンヴァルさんは別の部屋に移動です」

レイ「ま、待ってください！移動は今すぐじゃないといけないんですか！？」

レイ？どうしてそんなに慌ててるの？

山田「それはまあそうです。いつまでも年頃の男女が同室で生活をするというのはアーンヴァルさんもくつろげないでしょう？」

レイ「えっと……………私は……………」

と言って僕を見るレイ。

アポロ「レイ？山田先生を困らせちゃダメだよ？」

レイ「で、ですけど……………朝のアポロさんの事もありますし……………」

あー、そう言えば今まで朝起きてからレイに頼んでたからね。髪の毛とか。

アポロ「朝なら大丈夫だよ。自分で出来るようにならないといけないからね」

レイ「そ、そうですか……………わかりました。移動しますので部屋の番号を教えてください」

山田「はい。アーンヴァルさんは1042室です。はい、これが部屋の鍵です。じゃあ、おやすみなさい」

と言って山田先生はレイに鍵を持たせて部屋を出た。

レイ「それじゃあ、準備しますね」

アポロ「あ、僕も手伝うよ」

レイ「だ、だだだだだダメですよ！下着とか、色々あるんですから！」

アポロ「ご、ゴメンツ！そんなつもりはなくて……………ゴメンレイ！」

僕は多分今顔が真っ赤だろう。なんでそんなことも気が付かなかっただよ僕！

レイ「い、いえっ、アポロさんはそんなことをする人じゃないってわかってますから……………でも、アポロさんなら別に……………」

レイは顔を真っ赤にしてもごもごと小さな声で何か言っているけどよく聞き取れない。

レイ「……………できました」

それからしばらくしてレイは荷物をまとめ終えたようだ。

レイ「それでは失礼しますね」

と言ってレイは僕にレイをして部屋の玄関まで行く。

レイ「……………アポロさん」

アポロ「何？」

レイは玄関の前に立ち止まって僕の方を向いて問う。

レイ「この部屋に遊びに来てもいいですよね？」

それはすぐに答えが出る問いだった。

アポロ「良いに決まってるじゃん。のほほんさんだっってくるし遊ぶなら人数が多い方がいいしね」

レイ「！……………ありがとうございます！それじゃあ、また来ますね！」

そう言ってレイは部屋を出た。

最後凄く上機嫌だったけど……………まあいいか。

僕も寝よう。

鈴 S i d e

朝。

今日あたしはとある部屋の前にいる。

アポロの部屋だ。

だ、大丈夫。落ち着くのよ凰鈴音。自分の本当の好きな人が分かったのよ！

心は吹っ切れたのよ！大丈夫！いつも通りにアポロと接すれば！

コンコン。

鈴「あ、アポロ？いる？」

だが返事は帰ってこない。

おかしいな……………アポロは朝はいつもこのくらいに起きてるはずなのにな……………

ドア空いてるかな？

ドアノブをまわしてみるとドアはすんなりあいた。

鍵は閉めないのかしら？

それとも閉め忘れた？

とりあえず空いているのなら好都合だわ。

鈴「お、お邪魔しまーす」

そう言って部屋に入ってみる。そしてベッドに向かうと一つのベッドで布団が膨らんでいた。

もしかして布団の中で包まってるのかしら？

でも起こさないとアポロ遅刻するかも……………うん。起こそう。

鈴「アポロー、朝……………ぐはあっ！？（ズキューン！）」

い、いけない……………

布団をひっぺかしてみると気持ちよさそうに丸まって幸せな顔で寝ているアポロがいた。

こ、この見た目でこれは反則よ……………は！いけない！鼻から愛が……………（ポタポタ）

アポロ「ん……………おふとん……………どこお……………」

鈴「……………ッ！（エクセレンツっ！）」

やばっ！こんな甘ったるい声出してるアポロ……………しかも……………寝巻が少しはだけで……………え、エロい……………

本当に女に見える。中学でもよくアポロは女と間違えられてた。しかも女よりも男に人気だった。

中には危ない奴がいたからあたしや一夏や弾でそいつをボコした。後悔も反省もしていない。と言うか一夏は意外にもブラコンだった。

だってはあはあ言って汗かきまくりでしかも漫画でよくあるグルグルメガネでデブで見た目からしてアレだったのよ！？

アレとアポロがもし二人つきりだったらアポロ貞操の危機だったわよ！

そいつ以外にもまだまだ危険な奴はいた。

特に……………あいつは嫌だったわね。

見た目はイケメンの部類に入るけど妙に馴れ馴れしいし。

何かあれば頭は撫でてくるし。よく後ろからついてくるし。自慢話ばかり。

一夏達とは小学生の頃からの知り合いで別に普通の奴だと思ってるみたいだけどあたしからすれば最悪よ。

アポロにもいやらしい目で見てたわね。アポロは全く気が付かないけど。しかもどんなについてくるなって言っても懲りないし学校でもかなり人気が出てから調子に乗るし……………いや、忘れましよう。

アポロ「うん……………りん?……………」

鈴「あ、おはよう。アポロ……………」

アポロ「……………どうして……………はなをおさえてるの……………?」

鈴「べ、べつに?それより、髪の毛梳いてあげるから!ボサボサだし!」

アポロ「ん……………おねがい……………」

そう言ってあたしは自分のポーチからくしを取り出してアポロの髪の毛を梳く。

そしてアポロ。どうしてあたしが鼻を押さえてるかはアポロの容姿と服の状況から考えてほしい。

アポロ「おはよう、鈴。後、髪の毛がとね」

鈴「気にしないでいいわよ」

暫くしてアポロはちゃんと起きた。

アポロ「ところで……どうして鈴は僕の部屋にいたの？」

鈴「え、えっとね？最初は……アポロを朝食に誘おうと思ってアポロが起きる時間帯に行ったんだけど返事がなくて、ドアの鍵が開いてたから起こしに行ったのよ」

アポロの寝ている姿を鑑賞してたけど嘘はついていないわよ。

アポロ「そうなんだ。ありがとね、鈴。じゃあ食べに行こう！」

あたしはそう言うアポロと一緒に食堂へ向かった。

一夏side

女子1 「やっぱりハヅキ社製のいいなあ」

女子2 「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」

女子1 「そのデザインがいいの！」

女子3 「私は性能的に見てミューレイのいいなあ。特にスムーズモデル」

女子4 「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝。クラス中の女子がカタログを手に賑やかに談笑していた。

女子5 「そう言えば織斑くんのISスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」

一夏「あー。特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいけよ。えーと、もとはイングリッド社のストレートアームモデルって聞いている」

というかよく覚えてたな俺。アポロにちゃんと勉強を教えて貰っているおかげだな。

山田「ISスーツは肌表面の微弱な静電気を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へ伝達、ISはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

とすらすら説明しながらあらわれた山田先生。さすがは教師。

女子6「山ちゃん詳しい!」

山田「一応先生ですから……って、や、山ちゃん?」

女子7「山ぴー見直した!」

山田「今日が皆さんのスーツ申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです。えへん……って、や、山ぴー?」

確か山田先生にはもう愛称が八個くらいついてたと思う。慕われている証拠だ。

というより会話の合間合間にツッコむのって疲れないのだろうか? のほほん「ところでアポロンのスーツはおりむーとは違うけどどこ

のゝ?」

そう言えばアポロのは何処のだろうか? 俺とは全然違うし。

アポロ「え? えっと」

アポロ? どうしてきょどってるんだ?

とそこへ、

千冬「諸君、おはよう」

『お、おはようございます!』

千冬姉登場。

それまでざわざわしていた教室が一瞬でぴっと礼儀正しい軍隊整列の様なものになる。

千冬「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもない者は、まあ下着で構わんだろう」

アポロ、一夏「いや! 構いますから!」

この時ツッコんだ俺とアポロは間違っていないはずだ。いや、はずじゃない。絶対だ。

千冬「静かにしろ織斑兄弟。では山田先生、ホームルームを」

一夏「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬姉が山田先生にバトンタッチする。下着とかはジョークのはずだ。じゃなければ冗談だ。

山田「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」

女子1「え……」

『えええええええっ！？』

いきなりの転校生紹介にクラス中がいきいきにざわつく。そりゃそう
だ。

というか、なんでうちのクラスばかり？分散させないのか？

そう考えていたら教室のドアが開いた。

???「失礼します」

クラスに入ってきた二人の転校生を見て、ざわめきがぴたりと止まる。

そりゃそうだ。

だって、

二人とも男子だったからだ。

だが、俺とアポロと箒は別の所で驚いた。

入ってきた二人の男子のうち片方は濃い金髪でそれを首の後ろで束ねており人なつっこそうな顔。礼儀の正しい立ち振る舞いと中性的に整った顔立ち。

もう片方は短く整った銀髪。背もすらりと高くスマートだ。そして顔は美形。いわゆるイケメンだ。

その銀髪の方は俺達とは小学から中学までの知り合いだ。

第十五話 金と銀の転校生（後書き）

ラウラと思ったか！実はアニメバーションの少し手を加えたパターンなのだ！

……………ブラックラビッツ党の皆様すみません。

次回は話を出す前に鈴も嫌っていた転生者の話を少し出そうと思います。いわゆる閑話です。

では、閑話ではなく本編の次回予告！

《次回予告》

箒、鈴「なんであいつがここに居る（のよ）！」

一夏「結構いい奴だっと思うんだけどな……………」

アポロ「うん……………いい人だよ？」

鈴「アポロ！絶対アイツに気を許したらダメだからね！絶対よ！」

レイ「いったいどんな人なんでしょうか……………」

アポロ「次回！『またまた訓練！アポロVS山田先生！』」

五人「って山田先生が相手！？」

それと、本日から1月2日まで実家に帰るので執筆しませんし投稿もできません。

ノートパソコンなので持って帰ってもいいのですが従兄妹たちが帰ってくるので痛い目で見られるわけにはいきません！なのでできませんが感想などはケータイで返しますので感想は大丈夫です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4403y/>

IS（インフィニット・ストラトス） 創聖ノ翼

2011年12月28日23時27分発行